

書評

A young child with curly hair, wearing a dark, long-sleeved dress, stands in the center of the frame. The child is looking directly at the camera with a serious expression. The background is a dusty, debris-strewn area, possibly a street or a construction site, with some wooden planks and other objects scattered around. The overall tone is somber and gritty.

第108号

書評編集委員会

特集●読書案内

「書評」編集委員会より

孤独の日々に良書に出会う……………千藤 洋三(法学部教員)

『脱学校の社会』……………赤尾 勝己(文学部教員)

反面教師としての私の経験……………元木 久(経済学部教員)

目的設定型読書と快楽追究型読書 ……須田 一幸(商学部教員)

ことばに惚れる……………高瀬 武典(社会学部教員)

「歴史体験」としての読書……………阿部 潔(総合情報学部教員)

寄稿

震災二年目のモノログ……………三谷 真

連載

日本中国ことばの往来ゆまを その53……………芝田 稔

▲研究余滴▼

フランス詩の歴史(その二)	山村 嘉巳	38
おいてけぼり——宮本輝試論 XI——	芝田 啓治	48
在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート 22	梁 永厚	54
日韓条約体制の教育指向	蘆田 東一	62
研究ノート(日本の法・政治思想史) ③		
一七・八世紀日本の政治思想——伊藤仁斎(一)		

短評

テロリストのパラソル	渡辺 昇	71
銀河鉄道の夜	坂崎 葵	73

投稿

「特集 戦後五〇年『特集にあたって』について	金原 淳	75
羅針盤		2
読者のコーナー		77
編集後記		80

1996. 4 羅 針 盤



最近、阪神大震災を契機として、ボランティアが脚光を浴びている。「自発的な」の意味をもつボランティアは、老若男女が、比較的簡単に社会への関わりをもてる活動として、社会的にも大きな注目を集めている。厚生省、労働省といった官公庁も、ボランティアへの注目度を高めているようで、今後、ボランティアの役割は一層高まっていくように思える。

一方で、ボランティアに対して否定的な見解も存在する。偽善的、善意の切り売りといった意見がそれにあたり、ボランティアを行う人の自己満足としてしか機能していないということが、その主たる見解である。

こういった問題は、ボランティアの現場の、しかもさまざまな局面において露出する。震災直後、全国から数多くのボランティアが流入した神戸では、お年寄りの世話や救援物資の運搬など様々な形でボランティアが活躍した。食べることをはじめとした「生」の根本に関わる事柄に事欠いた状況の中で、ボランティアへの感謝のことが多く聞いた。ボランティアをしている人々も自分の行為が社会的に貢献していることを実感し、生き生きと活動していた。しかし、一週間、二週間と時間が経過し、被災者の抱える問題が生命に関わる問題から、将来の不安に関わる問題へと移行していくなかで歯車がズレはじ

めたのだ。帰る場所のあるボランティアと帰る場所のない被災者、この根本的な立場の違いをもつ両者の間に断絶は発生する。

被災地で、ある被災者から、こんな話を聞いた。

「被災者はだんだんボランティア慣れしてきている。

被災者は自分でできることを自分でやるという原則を忘れて、やっでもらうことを当然だと思ってる」。

一方で、「他人の世話になつてるといことが、いたく本人のプライドを傷つけることだつてある。ボランティアは手を差し延べればいいつてもんじゃない」という声も聞いた。

お世話をして『ありがとう』と言ってもらえることを前提として活動してきたボランティアにとつては、きつい台詞だ。そこでムツとした瞬間、それを見抜いた被災者との断絶は一層深まる。

「こつちから頼んでやつてもらつた訳じゃない。偽善者ぶりやがつて」

口に出さずとも、被災者がそう思った局面はあつたはずだ。それに対して、ボランティアはこう感じる。

「人に世話になつておいて、何て奴だ。礼も言えないのか」。両者の間に生まれた溝は決定的だ。

あるボランティアのリーダーのコメントに面白いもの

があつた。そのグループはかなり規模が大きく、構成員のなかには、ボランティアにはあまり関心がないが、友達などに無理やり誘われて参加した人々も少なくなくなつたという。ここでは、ボランティアにもともと関心のない人よりも、そうでない人々のほうが、被災者とすなりとけこんでいったようだ。

もともとボランティアに関心のなかつた人のほうが、あれこれ理屈を考えずに等身大でのつきあいを自然にできた一方で、関心のある人は、気をつかいすぎたり、お札がないといつて怒つたりとトラブルが多かつたという。何も、ボランティアに関心がある人すべてが、ボランティアを上手くできないといつていいのではない。ボランティアとは何なのかという根源的なことに立ち戻つて考えてみよう。

ボランティアは、「自発的」という意味を含み、進んで社会事業に参加する人という意味で使われることばである。拠つてたつのは自分の自発性であり、それは、困つた人を助けるためという以上に、自らの自発性を実践するためと捉えた方がよいと思う。

『ありがとう』を期待しているうちは、何かを「してあげる」という偽善者の域を越えられないのではないだろうか。

(稲葉耕平)

読書への誘い

読書案内目次

千藤洋三 (法学部)	5
赤尾勝己 (文学部)	8
元木久 (経済学部)	12
須田一幸 (商学部)	16
高瀬武典 (社会学部)	19
阿部潔 (総合情報学部)	22



読書案内 特集にあたって

大学は自由な空間である。自分のやりたいことがあれば、何でもできる所である。しかし、それを裏返せば、自分で何かをやらうと積極的に行動しない限り、何もできない所でもある、ということになる。それは学問研究活動の分野においても言えることである。講義を受けるだけでなく、図書館で文献を調べたり、フィールドワークを行うなどといった自主的な活動が必要とされる。

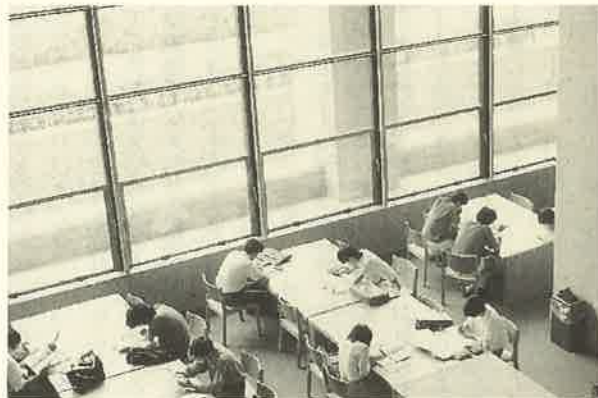
今回の特集である「読書案内」では、そういった自主的な研究活動の入口となるような本を紹介していた。研究活動を職業にしている各学部の教員の方々に、研究活動に入るきっかけとなった一冊の本を紹介して頂いている。また、新入生が自分の専攻以外の学問についても、気軽に触れることができるように配慮して紹介していた。例えば、社会学部生だから、社会学しか研究しないというわけではないだろう。自分の専攻以外の学問について知るきっかけになることもあると思う。そのような学部の枠組みを越えた、学際的な場としてのこの「書評」が位置付くように、私達編集委員会は編集活動を行っていきたいと考えている。新入生諸君の大学生活において、この「読書案内」が研究活動の第一歩となれば、幸いである。

孤独の日々に良書に出会う

千 藤 洋 三
法学部教員

人生五〇年も生きていれば、誰しも幾度か苦しい時期を経験していることだろう。私にとってもっとも苦しかったのは、一五歳の春だった。無理して一流といわれる高校を受験し、見事に失敗した。同じ中学校から受験した二〇人のうち一九人は合格したというのに。もっとも、冷静になって省みれば、母の死とともに広島での生活に別れを告げ、大阪に戻ってきたのが中学一年の終わりであり、それまでさして勉強もしていなかったから、当然の結末といえた。ともあれ、訪ねて来る友もなく、ま

た訪ねて行くべき友もいなかった。寂しく孤独な日々が始まった。昭和三六（一九六一）年三月二〇日のことである。当時はまだ、中学浪人なんてほとんど聞いたこともなかったし、塾も予備校も近所にはみあたらなかった。本当にどこにも行き場がなかった。まるで格子なき牢獄に入ったかのような閉塞感と無力感に覆われた生活のスタートである。このような状況のときに、父の知人が一冊の本を呉れた。それが、おおげさといえば、その後の私の精神的支柱ともなった角川書店の昭和文学全集第一



○巻『安倍能成（あべ よししげ）・天野貞祐（あまの ていゆう）・辰野隆（たつの ゆたか集』（昭和二八年初版発行）であった。

安倍先生（二八八三一―一九六六）は、夏目漱石の門下生で第二次大戦

後に学習院長や文部大臣などを勤められた哲学者・教育者であった。

天野先生（一八八四—一九八〇）は、京大哲学科の教授でドイツの偉大な哲学者カントの研究者で、旧制第一高等学校（現在の東大教養学部）の校長や文部大臣を歴任され、その友人に「『いき』の構造」で著名な九鬼周造教授がいた。辰野先生（一八八八—一九六四）は、東大仏文科の教授でボードレールの研究をされており、その門下生として渡辺一夫氏や小林秀雄氏らを輩出している。もっとも、今春、関西大学に御入学される新入生の諸君・諸嬢には、昭和五三（一九七八）年生まれの人もおられるほどだから、いうまでもなく、これら御三人の先生方にはまったく馴染みがないであろう。しかし、いずれの先生も、第二次大戦前後におけるわが国の知性を代表する著名人であった。勿論、私のような者に

とっては、雲の上の存在であったことはいうまでもない。

とにかく、私は、この随筆集をむさぼるように読んだ。真綿が水を吸うがごとく、繰り返し繰り返し…。どの程度、その内容を理解しえたのかは分からない。誰とも話すことなからただ時間が過ぎ去っていっただけだから。今でも、それぞれの先生方の文体らしきものが思い浮かんでくるほどである。三人のうちでは、辰野先生の文章が一番面白く、天野先生のがもっとも堅苦しかった。にもかかわらず、私は、天野先生のお書きになられた文章に深い感銘を受けた。「如何に生くべきか」「私の歩んだ道」など、著者の真摯な生き方に対する感銘を覚えたからであろう。勿論、自分の境遇と重ねてのことである。私は、思い切って先生にお手紙を差し上げた。それが、どのような内容であったかは覚えていない。先生

からお葉書で次のような御返事をいただいた。少し恥ずかしい気もするが、紹介してみよう。三五年間ずつと大切に保存してきたものである（句読点は、適宜、私がつけた）。「御手紙拝見いたしました。貴君がわたくしの書いたものによって勵まされなくさめられたということは、著者にとってこの上なくうれしいことです。貴君は文章も文字も立派ですから勉強をなされば高校へ入れると思います。『急がずに休まずに』おやりなさい。貴君のお母さんはもうお亡くなりになったそうですが、わたしも十七才の時母が病気で亡くなり、七十七才の今日でもお母さんがなつかしいのですから、貴君のお気持ちもよくわかります。生きることはつらいことです。しかし辛抱して立派な人物になって下さい。御大事に 七月二十日 貞祐」というものであった。一五歳の少年に宛てたものだから

ら、多少割り引いて考えなければならぬが、「生きることはつらいこと」とか、「辛抱して立派な人物に」といった箇所に、先生の人生観が如実に物語られているといえよう。

ともあれ、私は、お葉書を受け取り、本当に嬉しく、一人で生きていくのではない、頑張って勉強しよう、と真実励まされたものである。もし今、私に教育に携わる者として幾分なりとも学生に対し面倒見のよさがあるとするれば、このときの先生から受けた薫陶によるものである。また、教育職に従事することの喜びのようなものを、無意識のうちに醸成されたのかもしれない。

こうしたことを契機として、私は、分らないなりに、より一層の興味を哲学書に抱くようになった。カント〔一七二四—一八〇四〕の「純粹理性批判」などにただやみくもに憧れ、阿部次郎の『三太郎の日記』

や出 隆『哲学青年の手記』に涙し、また刊行が始まったばかりの中央公論社「世界の名著シリーズ」の第一回配本『ニーチェ』（昭和四一年）にのめり込んでいった。この書に、ニーチェ（一八四四—一九〇〇）が、永劫回帰の思想で有名な「ツアラトウストラ」への靈感を得たといわれるジェノヴァ近くの「ポルトフィーノの岬の断崖」の写真が掲載されている。その吸い込まれそうなほどの鮮やかな紺碧の海の色が脳裏に刻まれ、今なお鮮烈な印象を思い起こさせてくれる。

後年、大学に入ってから、和辻哲郎『風土 人間学的考察』（岩波書店、昭和四三年）や九鬼周造『偶然性の問題』（岩波書店、昭和四五年）など、哲学書には関心を抱き続けることになった。結局、これらのことが、今から振り返ると、独りで物事を静かに考える仕事である研究

職に、私を向かわせたのである。私は、少年期から青年期へと成長する過程で、本書に出会ったことを、今しみじみと幸せであったと実感している。入学試験に失敗したことも含めて。

時は移り、世の中も随分と変わった。現代という時代は、若者たちが哲学書を読むなんてダサイとでもいった感覚で、彼方に追いやられてしまっているように思う。しかし、思い切って紐解けば、哲学書は必ずや皆さんの知的な欲求を充たしてくれるであろう。良書に是非とも巡り合っ

て頂きたいものである。

追記 校正中に、司馬遼太郎氏のご逝去を知る。『坂の上の雲』や『俄—浪華遊俠伝』から生きる力と御祈りします。

（せんとう ようぞう）

『脱学校の社会』

イヴァン・イリツチ著、東洋、小澤周三訳

(東京創元社、一九七七年)

赤尾勝己
文学部教員

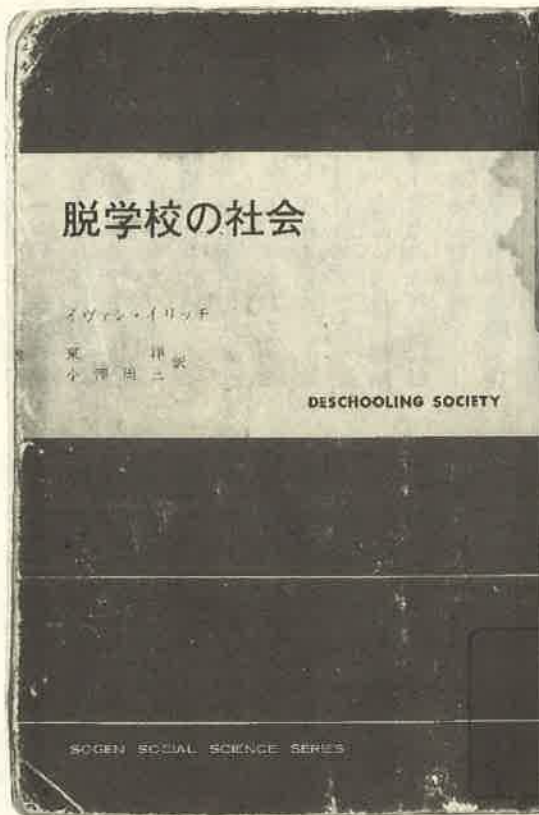
私の専攻は教育学、その中でも現在は、生涯学習論・社会教育を主たる専攻領域としている。私が教育学を専攻しようと思ったのは高校時代であった。その頃はごく自然に小・中学校の教師になろうと思っていた。私の小・中学校時代は私にとって幸福な時代であり、よい先生方との出会いもあり、ごく自然に自分も大きくなったら教師になりたいと思っていた。そして、教師になろうという人たちが学ぶ教育学とはどんな学問なのか興味があった。

しかし、こうした素朴な問題意識

も教員養成を目的とする学部（教育学部）に入学したとたん失望に変わってしまった。なりよりも教師になろうという人たちの考え方の浅はかさ、に失望した。教師の多くは公務員で生活は贅沢をしなければ安定しているし、田舎では一応尊敬されるし、他にやることもないからという理由で教師になろうという学生が多いのにびっくりした。また、日本社会で生起する事件の根底を考えていこうという志向の低さと視野の狭さにはあきれられるばかりであった。大学入学当時（一九七〇年代後半）は、

大学闘争も終結期にあつて、大学全体が何か方向性を見失ったかのような閉塞感に包まれていたことともこれは無縁ではないだろう。しかし、それにしても、こうした学生たちと自分は一緒に流されてよいのか、と考え始めた、そして、もっと大きく物事を根底から見据える職業に就きたいと思うようになった。「自分探し」のために、夢中で興味にまかせていろいろな分野の読書をしたのも大学1〜2年生の頃である。

当時、教室で学ぶ「教育原理」のテキストの内容にしても、どこか理念的で現実の教育問題について答えておらずきれいごとを並べたようでウソ臭かった。だがいつしか、こんな内容の教育学の書物でよいのだろうか、もし自分の力量が許すならば、自分で教育学に関する書物を書いてみたいとも思うようになった。教育について自らの経験に基づき語るこ



とは誰にもできる。しかし、これをどう学問へと高めて行けるかが問題である。既存の教育学関係の書に食傷気味だった私にとって、シヨック療法ともいえる書がここに挙げるイリッチ (Ivan Illich) の『脱学校の社会』である。

イリッチは、一九二六年にウィーンに生まれ、ザルツブルグ大学で歴史学の博士号を取得後、アメリカに渡りニューヨークでカトリックの助任司祭となり、一九五六〜六〇年、プエルト・リコのカトリック大学の副学長を勤めた後、メキシコのクエ

ルナバーカに国際文化資料センターを設立して今日に至っている。

本書の底に流れているのは、ラディカル・ヒューマニズムとも言える立場である。まず「個人の学習すべき内容や方法を公が決定できるとする考え方そのものの検討が必要」であるとして、義務教育制度に対する批判がなされる。義務教育制度はすべての子どもを学校に収容することにより、諸国家にとって必要とされる知識を効率よく子どもたちに身につけさせることに成功してきた。しかし、これによって子どもたちへのナシヨナリズムの注入というイデオロギー的統制に加えて、社会全体が「学校化」してしまう事態がもたらされた。つまり、私たちが今経験している、学校に行かなければ学んだと見做されない社会の出現である。そうした「学校化された社会」(schoolled society) においては、人々

は自ら学ぶ気力が萎え（心理的不能）、学校の教室において教師の教授の下で学ぶ内容こそが価値のあるものであり、それ以外の学習には価値がないと思ひ込まれる。また、教師によって教授されるといふことと自ら学習することを混同するようになる。同様にして、病気になる場合、病院に行つて医者によつて診療を受けなければ自ら病氣であると認定されない。あるいは自己治療力を無視して副作用のある薬を飲むことによつて、あるいは手術やいくつもの管を身体に通された治療（スパゲティ症候群）によつて病氣は癒されるといふ信念を強化されていく。彼はこれを「価値の制度化」(institutionalization of values)と呼ぶ。ここには学校や病院を貫く一つの支配様式、すなわち「専門家支配」が存在している。資格を持った教師や医師の存在が、私たちの「自

ら学び、自ら癒す」といふ自律的な行為を、「教える、治療する」といふ他律的な行為に逆転させているのである。彼が構想する社会とは、そうした専門的エージェントに依存する度合いを低めた、人々が「自ら癒す」ことを基点に据えた「自律共働社会」(convivial society)である。こうしたことから、イリツチの思想は単なる学校教育制度批判にとどまらない壮大な文明批判であることがわかる。

そのうえで、彼は学校教育の代替案として「学習のためのネットワーク」(learning webs)を提案する。それは、①教育的事物のためのレファレンス ②技能交換 ③仲間選び ④広い意味での教育者のためのレファレンスからなる、「自分の知っていることや信じていることを他の人々に分かち与えるための手段を平等に利用する権利を保全するための」ネット

トワークである。イリツチの学習ネットワークや自律共働社会の構想は、若干楽観的でかつ権力認識に甘さを残すものの、教育をここまでラディカルに切開いた人を私は他に知らない。彼の言わんとすることを、私たちに引きつけて言うならば、小・中・高校と計一二年間、学校教育において学ばされてきた教科目の枠を超えて、受験勉強を含むその年月において削ぎ落とされてきた私たちの「知」を、大学時代だけでなく生涯にわたつての読書や他者との語りあるいはサークル活動等によつて奪回することであろう。

一九八〇年代に入り、私は、メキシコのイリツチの下に弟子入りした山本哲士氏とも出会い、本書を含め日本における脱学校論の表面的な紹介・受容のしかたに問題があることを知った。また、市民運動団体「イリツチ・フォーラム」にも参加して

多くの人と語り合う機会をもった。この書は学生諸君にも比較的人気の高い、エーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』（東京創元社）が提示している議論とも接点がある。これはやがて私をして、学校教育を超えて生涯にわたって学ぶことができる社会をどう構築するかという問題、すなわち「生涯学習論」という研究テーマへと導くことになった。イリツチは、生涯学習論に対して「今では次の段階として教師という治療者が、人々に対して生涯にわたる教育的治療を行なおうとしている。」と手厳しく批判しているが、私は学校教育が次第に現在のような競争・選抜的体質を弱めながら、学校教育の外側により自由な学びを選択できる社会——そうすることで現在の学校のあり方そのものを考えていく社会が来ることを願いながらポチポチと研究を続けているところである。

新入生の皆さんには、学生時代にこうしたスケールの大きな書と格闘すること、ものごとを根底から（ラディカルに）考えることをぜひともやっていただきたい。これは本を読むことによるのはもちろん、サークルやゼミナールの場等における友人との論議を通じてもできるであろう。関大の学生諸君は他大学の学生と比較してよく書物を読んでいるので安心していい。おそらくイリツチの言っていることは、諸君には

すぐに理解できるであろう。学生時代を通じて「常識」を乗り越えてより深く考えることができるようになるならば、この社会の「日常生活」はなんと表面的に構成されているかわかるであろう。それでよいのである。大学時代は読書を通じてものごとの本質にこだわってほしい。もちろん、実社会を決して甘く見てはならないが……。

（あかお かつみ）



反面教師としての私の経験

元 木 久
経済学部教員

私が入学する前年は日米安全保障条約（安保条約）改定問題を巡って空前の反対運動で盛り上がり、ある意味で国民の政治意識の最高揚期だった。この安保改定は戦後の厳しい冷戦体制と強く結びついていた。一九五七年秋、ソ連が人工衛星の打ち上げに成功し、後れをとったアメリカが軍事戦略上、日本を、核を含む前線基地化させるよう方針転換して、条約改定交渉が一挙に具体化したものであった。

私の在学中に冷戦を象徴する事件も、六一年八月、ベルリンの壁構築。

六二年一〇月、米ソ両大国の一触即発のキューバ危機。六四年八月、アメリカ政府はトンキン湾で米駆逐艦が北ベトナムの魚雷艇の攻撃を受けた（これは、後にアメリカの謀略と判明）として、北ベトナムを報復攻撃し、本格的なベトナム戦争に発展。こうした世界状況の中で、日本経済は、ますます激化する公害、過密過疎など、国民生活に直結する由々しい軋みを抱えながら、重化学工業、家電部門、自動車部門の生産を拡大し、高度成長軌道をばく進しようとしていた。高速道路、新幹線などの



工事も始まっていた。

私が大学生活を送ったのはこうした時代である。世界における日本の将来を大局的に判断できる考え方を自己の中にもちたいという強い衝動は当時の学生に共通したもので、私もその一人であった。

専門の講義の多くは旧制大学の方式をそのまま踏襲していたように思われる。教授は講義内容を学生が理解できるかどうかは無頓着で、理解したいなら、自分で勉強すべし、そのため取っ掛かりをいくつか示しているに過ぎないというような雰囲気であった。試験問題といえば、たとえば経済原論は「利子の役割を論じて資本の本質に及べ」であった。いまでも、私はこの問題が解けていない。にもかかわらず、不思議なことに、私は「優」で合格したのである。「外国書講読」があった。私が選択したのは J. M. Keynes, *The General Theory of Employment, Money and Interest* (以下『一般理論』) をテキストにした講義であった。プリントが配布されたが、私は初めて原書を購入した。いまでも私の手許にある。丸善からでたりプリント版で、三八

〇円であった。これを選択した理由は上で述べた当時の学生の衝動と、「名著・古典を原書で読め」という当時の教えを実践しようと思ったからである。専門課程に上がったばかりの2年次後期のことであった。

経済学の基本知識すら持ち合わせていない私が『一般理論』を読むというのは夏装束で冬山に登ろうとするのと同じである。『一般理論』の序文は「本書は主として私の仲間



ケインズ

ある経済学者たちに向けて書かれたものである」で始まり、「困難は、新しい思想にあるのではなく、大部分のわれわれと同じように教育されてきた人々の心の隅々にまで広がっている古い思想からの脱却にある」で終わっている。古い思想が古典派理論であることは一頁だけできている第一章を読めば、すぐ解るが、古典派理論の何たるかを知らない私には脱却も何もなかった。原書で読もうと翻訳で読もうと、意味不明という点では何ら変わりが無い。

そこで、『一般理論』という険しい冬山の輪郭だけを把握しようとして、私は道案内人である先生の説明に耳を傾けることにした。その道案内人は地図を必要としないばかりか、山それ自体を構成する岩石の種類やその成分まで知り尽くしており、その山のもつ欠陥まで明らかにすることができた。所詮、夏装束程度の装備

しかもたない私は、脳細胞の稼働率がたちまち一〇〇%を越してしまつたのである。極度の消化不良に悩まされながらも、「ケインズ革命」と呼ばれる『一般理論』の骨子のようなものがうつつすらと見え隠れする気がした。それは偉大なる道案内人がいたからである。その授業では、『一般理論』の一〇分の一も進まなかつた。

講義が終わつて学年が変わろうとする頃、私は『一般理論』の最終の第二章「一般理論の導く社会哲学に関する結論的覚書」を読んだ。完全な中抜きである。この章はケインズ理論そのものが解らなくても、ケインズの主張がある程度理解できる。そのとき、私が注目したのは、戦争の原因として市場獲得競争があり、国内政策によつて完全雇用が実現できるならば、一国の利益が他国の不利益をもたらすような国際的市場獲

得競争の必然性がなくなるであろうと論じている点である。ますますひどくなる公害を撒き散らしながらひたすら高度経済成長軌道を走る日本経済と厳しい冷戦体制を考へる足がかりになると思つたからである。

こうしたことから、私は『一般理論』をもつと理解したいと思ひ、原書の二倍の値段（七五〇円）の訳書を購入した。その翻訳は原書を横におかなければ、日本語のつながりがはつきりしな思われた。お陰で英語と日本語の力がついたように感じたものである。言葉より内容の理解が何よりも大事であるが、容易に解つたような気持ちにならない。急がば回れとばかりに、『一般理論』にてでぐるリカードウ、ミル、ピグーなどの書物を図書館から借り出したが、それ自体の理解に難渋し、『一般理論』の理解に直結しそうなものなかつた。解説書と思しきものを二冊購



入したが、それらは著者自身の『一般理論』研究ノートで、初心者の中には、『一般理論』の理解を助けるどころか、混乱させるとすら感じた。ともあれ、解るところだけ解るといふような読み方をしていた。

そうこうしている間に、私の周辺には『一般理論』を軸にその関連文献が増加していき、解るところだけ解る範囲が少しずつ増えていくような気がしていたが、まだ、自分の言葉で喋ることができない幼児段階か

ら抜け出していなかった。その段階から一挙に脱出できる解説書に出合った。それはその当時からさらに五年も前に出版されていたものであり、何と、私はその著者の一人に外国書講読を教えてもらっていたのである。その書物は現時点でも出色の、素晴らしいケインズ理解の書であり、版を重ねて三〇年以上も出版され続けた、新野幸次郎・置塩信雄著『ケインズ経済学』（三一書房）である。

意味不明の部分が多く、現実経済に対応できるような状態になかった。ただ、経済変動という変化に関心をもち私には何か満たされない感じがしていた。『一般理論』が水準を問題とする静学の領域にあり、私の関心が動学の領域にあると明確に認識したのはそれから暫く後であった。ともあれ、私は学生時代に極めて迂遠で非効率な方法で経済学にアプローチしていたと言わなければならぬ。いまでは、段階的に学べる教科書がたくさん出版され、よい教科書には理解度に対応した文献が紹介されている。それに従って順次階段を登っていくのが思考の効率性の上で望ましい。そして、ある段階まで達したとき、名著・古典・原典を覗いて、じっくり考えてみるのがよいと思う。自分の思考の範囲、深さ、論理の太さなどを検証することができらるであろう。

私が『一般理論』にかじりついたのは自分の関心・問題意識に対応したからである。私の経験から言えば、自分の理解能力をはるかに超えているのに、あるいは、関心がないのに、古典や名著という理由で読むのは生産的であり、消耗的である。自分の関心・問題意識に対応して理解可能なものを濫読するのがよい。ただ、短くてよいから、読んだ書物にたいして、自分の書評を残すようにしたい。元氣のある人にはそれを著者に送ることを勧めたい。このようにしている、いずれ、これは、と思う書物に行き当たるはずである。素晴らしい書物は自分の問題意識を鮮明にしてくれるし、掘り下げてくれる。そして、もっと追究してみたくなる。そうした良書に巡り会うまで濫読されんことを！

(もととき ひさし)

目的設定型読書と

快樂追求型読書

須田 一 幸
商学部教員

やがて悲しき目的設定型読書

自分の好きなことをして一生を送りたい、と誰でも思う。しかしこれがなかなかむずかしい。なんといつでも自分の好きなことをして収入を得るのはそう簡単ではないし、さらに、たとえ自分の趣味を運よく職業とすることができても、趣味を仕事にした途端、趣味は苦行となる場合が多いからである。

読書もその例外ではない。私は学生時代、本を読むことがとても好きだった。だから、本を読んで仕事と

なる職業に就こうと思い、大学院に進学した。しかし研究者の道をめざした途端、読書が趣味であるとは言えなくなってしまうのである。同じ時間を費やし視力を低下させるのならば、小説ではなく専門書を読む……というけちな考えに支配され、仕事としての読書が続いたのである。しかも著者の真意を知るには原典に当たる必要があり、英語やドイツ語の本を一行ずつ精読するという読書であった。これは、一つの理論を修得するという目的に規定された読書であり、読書のタイプとしては目的

設定型読書といえよう。目的設定型の読書は決して楽しいものではない。それはストイックであり、厳密性が求められる。研究者になるためには、一度は経験しなければならぬタイプの読書であろう。



快樂追求型読書のすすめ

しかし新人生の皆さんには、まず読書の楽しさを知ってほしい。ストイックでなくともいい、いいかげんな読み方でもいい、気持ちのいい快樂追求型読書のすすめである。人間には本来、食欲や性欲と同じように知識欲があるといわれている。皆さんは受験勉強で欲望を健全に発散することができなかった。いまこそ知識欲を十分に満たすべきであり、そのため読書をしてほしいと思う。ではどんな本がおすすですか。私が皆さんの年代の頃に読んで面白かったものをあげても、あまり意味はない。気持ちよく楽しめる本は、人によって時代によって異なるからである。むしろ様々な面白い本を紹介したガイドブックを示し、それを見て皆さんがこれだと思う本を探したほうがいいだろう。世の中には、驚く

ほどの「本の目利き」がいる。その人たちの読書案内を利用しない手はない。ここでは、向井敏と井上ひさし、中村達也を取り上げよう。

大阪の出身で電通に勤務後エッセイストとして活躍している向井敏の『贅沢な読書』（講談社現代新書、四八〇円）と『傑作の条件』（文春文庫、四五〇円）は、古典文学からミステリーまで幅広く扱い、格好の読書案内となっている。ここで紹介された本を私も何冊か読んだが、例外なく楽しめた。作家の文体を論じたものに『文章読本』（文春文庫、四五〇円）がある。彼の辛口批評が私は好きだ。言わずと知れた井上ひさしの最新作『ベストセラーの戦後史 1、2』（文芸春秋、一三〇〇円）は読書案内というより、ベストセラーになった本を通じて社会の動きを描写したものである。楽しませながら知識欲に訴える名手であろう。坂本藤良の

『経営学入門』と長島茂雄を結びつけるあたり、思わずニヤリとする。

経済学者の中村達也（中央大学）教授による『読む』（TBSブリタニカ、三二〇〇円）は、社会科学関係の本三四二冊を扱った、すてきな読書案内である。彼によれば、サトウサンペイの『フジ三太郎名場面』（朝日新聞社）も経済学の対象になってしまう。裾野の広い本の読み方に、私はただただ敬服している。

こうした読書案内を参考に自分の好きな本をみつけてほしい。皆さんは今まで、現代国語の成績を上げるために漱石の本を読んでいただろう。英語の点数を上げるためにヘミングウェイを読んでいたのだろう。それではいけない。まず快樂追求型の読書をして下さい。

目的設定型読書のすすめ

読書の楽しみ方がわかれば、次は

目的設定型読書である。皆さんはそれぞれ目標を持って大学に進んだはずだ。英会話をマスターしたいとか、経済の仕組みを知りたいとか、コンピュータをいじりたいとか、公認会計士になりたいとか。そのような目的の達成に有効な本をみつけ、それを丁寧に確実に読み進める必要がある。これが目的設定型読書だ。目的さえ明らかであれば、おすすめの本を提示することは比較的簡単である。

たとえば、英語の理解を深めたい人には、マーク・ピーターセンの『日本人の英語』『続日本人の英語』（岩波新書、四八〇円）をすすめる。自分の英語感覚がいかにずれているかを痛感することであろう。

経済の仕組みを知りたい人には、河合・武蔵・八代『経済政策の考え方』（有斐閣アルマ、一七〇〇円）をすすめた。切り口が新しく生き

生きしている。日本の経済システムを総合的に理解するには、鶴光太郎『日本の市場経済システム』（講談社現代新書、六五〇円）がいいだろう。青木昌彦（スタンフォード大学）教授の考えに強く影響されているが、

コンピュータをいじりたい人のために、諏訪邦夫『パソコンをどう使うか』（中公新書、六八〇円）を選んでみた。Windows95以前の内容だが、パソコンを活用するコンセプトがうまく説明されている。公認会計士になりたい人は、まず企業会計の全体像を把握する必要がある。佐々木秀一『ベーシック財務諸表入門』（日本経済新聞社、九五〇円）で門を叩いてみよう。

以上、新入生の皆さんの入学動機を想定し、その目的に適合しそうな本を示した。いずれもハンディ・タブで、電車の中でも読める。値段もリーズナブルだろう。ぜひ一冊手

に入れ、それを丁寧に内容を吟味しながら読んでほしい。これが目的設定型読書というものだ。

目的設定型読書と

快樂追求型読書の融合

本が好きで研究者の道を歩み始めたのに、大学院生の頃から読書は趣味でなくなってしまう。目的設定型の読書が多くなり、読書全体がさほど楽しいものではなくなつたのである。では、現在の私はどうか。大学院を出て一〇年、私の読書スタイルは新たな変貌を遂げている。ふふ。痛いのも慣れてくるとそれが快感に変わるといふ。特定目的のために専門書を読んでも今の私は、ミステリーや恋愛小説を読むときのように快樂を覚えるようになったのです。目的設定型読書と快樂追求型読書の融合ですね。

(すだ かずゆき)

大学の教員が学生に「読書案内」をするとき、まず思い浮かぶのが「古典を読む」というせりふである。なぜかという、そう言わなければ、学生が古典を読んでくれなくなる心配が強いからである。青年は快樂のままで正直である。読めば楽しいにきまっている本ならば、ほおっておいても学生は読む。ところがほとんどどの学生にとって、古典的な著作は退屈である。自然の情として、退屈なものをわざわざ読む気にはならない。そこで、あの手この手を使って、その本は読む値打ちがあるのだとい

うことを知ってもらわなければならぬ。

「この本はとてもタメになります。だから読みましょう。」私が青春を過ごした時代には、まだ、こういう殺し文句が通用した、ところが、今の若い連中は、この種のアドヴァイスには何となくおしつけがまし、胡散臭さを感じてしまうらしい。彼ら（あるいは君たち）は、本当にその本が役に立つのかどうかを実に冷徹に計算し、貴重な自分の時間を費やすに値するかどうかを検討する。その際、「今読んでおけば、すぐに

ことばに惚れる

マックス・ヴェーバー著

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

(大塚久雄訳、岩波文庫)

高 瀬 武 典
社会学部教員



はピンとこなくとも、長い人生の間以後でその意味がわかって、大学のときにこの本に出会っていてよかったですと思うときがかならず来るんだぞ」というような気の長い話は、まず信用されない。これだけ世の移り変わりが急激だと、そんな遠い将来の保証を信じて今現在の時間を無駄な読書に費やす気になれないのも無理はない。「大学生になったら、マジメな本を読まなければ恰好が悪い」という類の見栄と結びついた教養主義は、いまや完全に滅亡した感がある。

しかし、古典のほうからみれば、今のほうがかえって幸福な時代なのかもしれない。少なくとも、「俺はこんなに教養があつてエライのだ」といつて威張るための手段として読まれることがなくなつたのは喜ばしい。また、読みたくもないのにいやいや読まされた連中が「さすがに難しい。

たいしたものだ」という感想だけ吐くような不幸な事態も避けられるのだから。読む側の人生経験や思索経験から自然に沸きたつてくる問い掛けに答えるときにこそ、古典は古典として生きるのである。

どうも読書案内のほうですが、「無理してまで古典を読むな」という説教のようになつてしまった。私が言いたいのは、「できるだけ早く、古典を読みたくなるようになってほしい」ということである。生きていくうえで、ふと、過去の知恵にとんだ人の言葉をたどつてみたくなる、そ



ういう体験を早く得てほしい。そして、美しく感じる、もつとその意味を深く知りたくなるような古典の中の一節に出会ってほしい。もしもそういう体験を一度も得ていないとしたら、自分はどこかで不安を無理やり誤魔化してはいないか、ときどきは立ち止まって考えてみる必要がある。

学生時代に私を捉えて大きな衝撃を与えた古典的著作の断片を最後に紹介しておく。あえて解説をくわえずに断片を羅列するので、おそらく諸君には、これらの文の社会学的な

意味はチンブンカンブン、わけがわからないであろう。ひとつだけ説明すると、ここに述べられた、社会の近代化が抱え込んでいる「われわれは職業人たらざるをえない」という問題が、われわれの就職の問題にも、小学生のいじめの問題にも、はては老人の生きがいの問題にも深い影を落としているのである。

ただし、この際、社会学的な意味はわからなくともいっこう構わない。個々の言葉がたたえる美しさにどこかひかれるものがあれば、早速、ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を——最初は注の部分を読み飛ばしてもよいから——ひもといてほしい。私は、ある本と長いつきあいができるかどうかは、最初に一読したときに心ひかれる言葉に出会うかどうかで決まると思う。そこで、古典を読むときには必ず、印象的な文を抜き書き(今

はワープロを使っているが)したノートを作ってきた。そして、それらの文の意味をもっと深く知りたくなつたら、もう一度関連部分を読み返すのである。古典を読むには根気を要する。その根気を支えるのは、たった一つの心ひかれる文の意味を本当に知りたいという衝動であり、結局のところ理屈ではなく、その言葉に惚れたかどうかの話だと思う。ほんの一節のメロディに魅了されてやがてシンフォニー全体の美しさを知っていくように、たった一つの心をとらえるひびきの文との出会いが、古典に挑戦する出発点となるはずである。

(以下は、大塚久雄・梶山力による旧訳からの引用です)

「業績」と「断念」とは今日ではどうしても切り離しえないものとなつてている……

◇
ピユウリタンは職業人たらんと欲した——われわれは職業人たらざるをえない。

◇
……バックスターの見解によれば、外物についての配慮は、ただ「いつでも脱ぐことのできる薄い外衣」のように聖徒の肩にかかるに止めねばならなかった。それなのに、運命は不幸にもこの外衣を鋼鉄のように堅い外枠と化せしめた。

◇
……「最後の人々」にとつては、次の言葉が心理となるであろう。「精神のない専門人、心情のない享楽人。この無のものは、かつて達せられたことのない人間性の段階まですでに登り詰めた、と自惚れるのだ」と。

(たかせ たけのり)

「歴史体験」としての読書

一人の孤独な哲学者の人生に想いを馳せつつ

阿部 潔
総合情報学部教員

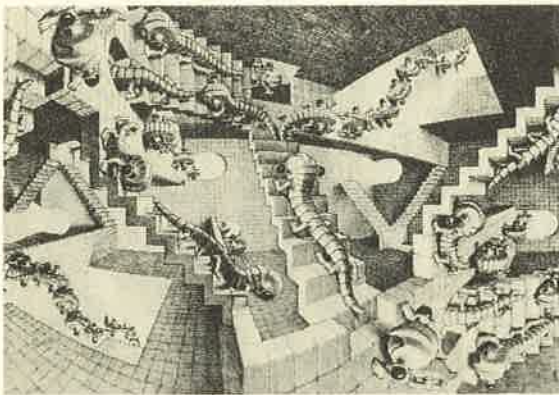
何のために本を読むのか。その理由は、当然のことながら人によって様々である。知識を広げるため、試験の準備のため、単なる時間潰し、などなど。色々な用途のために利用できる道具であることが、書物の魅力の一つであることは、今更言うまでもないだろう。しかし現在の我々の生活を振り返って考えてみると、「書物以外の便利な道具」が溢れていることも否定し難い事実である。若者の活字離れが嘆かれて既に久しいが、ニュースを知る手段として、新聞を広げるのではなくテレビのス

イッチをひねり、通学や通勤の時間潰しの手段として活字ではなくマンガを読むことは、現代に生きる我々の日常となった感さえある。このところ巷で騒がれているマルチメディア社会が現実のものとなれば、いわゆる「読書」が生活のなかにおいて占める位置はますます低下していくことが予想される。

それでは今後、読書は我々の生活から消えて行ってしまうのであろうか。私はそうは思わない。何故なら、読書には読書でしか味わえない快樂があるからである。勿論、本から得

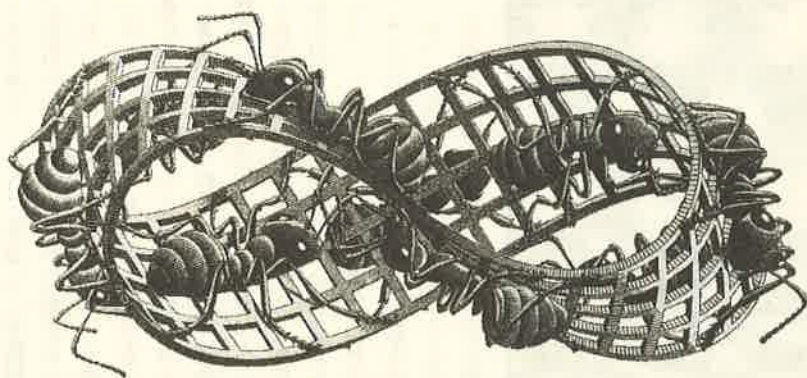
られる楽しみがどのようなものであるかは、人によってまちまちであろう。ここでは、自身の限られた経験を振り返ってみて、自分にとっての読書の楽しみが一体何であるのかについて、述べてみたいと思う。

結論を先に言えば、私にとっての



読書の快楽は、それを通じて得られる「歴史体験」とでも言うべきものである。誤解されては困るのだが、ここで言う「歴史」とは決して出来事や事件としての歴史ではない。勿論、歴史の教科書や時代小説を読むことによつて過去の史実を知ることが可能であるし、また歴史を学んでいくうえで、そのような読書は必要不可欠である。しかしここで私が問題としたことは、もう少し個人レベルの歴史、そう言つてよければ作者個人の「人生としての歴史」である。

ドイツが生んだ哲学者テオドル・アドルノの著作を読むときに、私はそのような「歴史体験」の痛みを覚える。ここで「痛みを覚える」と書くことには、それなりの理由がある。アドルノの人生は、決して平穏で幸福に満ちたものではなかった。ユダヤ系ドイツ人であり、また独自



のマルクス主義的立場から時代批判を試みていたアドルノは、一九三〇年代にヒトラーに率いられたナチス党が台頭することによつて祖国を追われ、アメリカ合衆国への亡命を余儀なくされる。当時の状況において、体制批判的なユダヤ人であることは、すぐさま死の危険性を意味していたからである。失望と苦難に満ちた亡命生活を続けた後、アドルノは戦後西ドイツへの帰還を果たし、ファシズム批判を貫いた批判的知性の体現者として社会的に高い評価を受けることになる。しかしながら、その栄光は晩年まで平穏に続いた訳ではない。一九六〇年代後半に現われた「怒れる若者」たちに、アドルノは当初尊敬の念を持つて迎えられた。しかし学生運動が先鋭化していく中で、「大教授」は批判の対象へと変化していったのである。戦前・戦中の抑圧と支配がはびこる暗い時代に自由

の大切さを身をもって主張したアドルノは、自由と解放を求め異議申し立てに立ち上がった戦後世代の学生達と、必ずしも歩調を一にすることは出来なかつた。理性の名のもとに「解放された社会」を夢見る伝統的ドイツ知識人と、自らの感性を信じて疑わない「恐るべき子供たち」との距離は、そう簡単に埋められるものではなかつたのである。アドルノが講義をしている最中に、一人の女子学生が自らの上半身をさらけ出し壇上に駆け上がるというパフォーマンス

を演じ、それに直面した老教授が狼狽の色を隠すことが出来なかつたという有名なエピソードは、当時の学生運動とアドルノとの関係を象徴的に物語っている。現在の時点から考えれば、このような形での知的権威への抗議がアドルノ自身にとつては勿論、当の学生達にとつても不幸な出来事であつたことは明白であろう。しかしながら、冷徹な歴史はここにおいてもアドルノに苦難を強いた。当惑と深い失望をもたらしたこの事件からほどなく、死に至る突

然の心臓発作がアドルノを襲つた。いま述べたようなアドルノの人生を見舞つた様々な事件は、彼の著作の中で直接的に言及されている訳ではない。哲学、社会学、美学、文化批評といった広範な領域にわたり作品を残したアドルノの筆致は、極めて論理的かつ冷静であり、自らが直面せざるを得なかつた数々の悲劇について感情を込めて声高に訴えるものではない。しかしながら逆説的に、その冷静さゆえに読むものに対して圧倒的な存在感を伴つてアドルノの



テクストは迫ってくる。冷めた言葉で綴られた文書の中に、その作者が置かれた苦難の人生を、さらにはそのような人生を生み出した暗い時代を、我々読者は痛みを持って感じ取れることを迫られる。そのことこそが、ここで私が言う読書を通じての「歴史体験」に他ならない。さらにアドルノのテクストが私にとって感動的であるのは、そのような苦難の人生や暗い時代を単に叙述することに終わっていないからである。時代がもたらした困難に直面しつつもそれに屈服することなく、知性を武器としてこの哲学者は必死の闘争を試みている。現代文明の問題点を根本的次元において捉え直した書物として名高い、ホルクハイマーとの共著『啓蒙の弁証法』（徳永恂訳・岩波書店・一九九〇年）に典型的なように、アドルノの知的活動は批判精神に貫かれている。アドルノにとって「思

考すること」は、時代に順応することなくその矛盾点を批判する困難な作業を続けていくという点において、「闘うこと」と同じである。そこに我々は、一個人の努力では如何ともしがたい歴史の暴力を前にしながら、それでもなお希望の光を忘れることなく「思考する／闘うこと」に自らの人生を賭けた哲学者の姿を見い出す。

アドルノの名著『ミニマ・モラリア』（三光長治訳・法政大学出版局、一九七九年）との出会いは、社会学を志した私にとって忘れることの出来ない一冊であり続けている。体系化されたテクストであることを敢えて拒否し、多岐にわたるテーマ群についてのアフォリズムの形式をとつたその書物から、私はアドルノという個人が体験した「時代」を感じると同時に、時代と格闘する孤独な哲学者の姿にある種の感動を禁じ得な

かった。そして絶望の果てにおいても希望を見い出そうとするアドルノの意思を、現代社会においても引き継いでいかねばならないことを、歴史の流れを彷彿うちつけばけな人間の一人として痛感した。その時の想いは、今でも変わることがない。『ミニマ・モラリア』という美しくも悲しいテクストとの出会いは、「歴史体験」——現代と結び付きさらに未来に対しても想いをめぐらすような読書体験——を私にもたらしてくれたのである。

新人生諸君が、これからの長くもあり短くもある四年間に、私とはまた違った形で、読書を通じた「歴史体験」の楽しさに接する機会を持つことを、一先輩として切に希望している。

（あべ きよし）

寄

稿

震災二年目のモノローグ

三谷 真

★震災後一年が過ぎましたが。

☆あつと言う間の一年でした。なんか、季節感がなくて、季節を楽しめなかった一年でした。震災のせいではなくて、歳のせいかもしれませんが、それと、私たちにとっては、震災後一年ではなく、震災二年目なんですね。

★なるほど。一年で勝手に区切るなど。

☆そうです。区切りは、まちができて、人が戻ってきたときに我々がつけるものなんです。

★街の様子はどうですか。

☆瓦礫はほとんどなくなつて、更地が増えてきました。

★復興へ向けて進んでいると。

☆いやいや、全然ですよ。瓦礫は瓦礫で、残っているのはつらいものがありますが、人が住んでたんだという感じがあるけど、更地は人の気配が全くなくて、更地が広がっているのはかえって不気味です。更地に家が建ち、地域が復活し、にぎわいが戻るのはいつになることやら。

★商店の再開は増えているらしいですが。

☆確かに数は増えていますね。でも、住民、つまりお客がいらないから、再開しても売り上げは全然伸びないんです。



★そうか、何よりも住民が戻ってくるのが復興への足がかりなんだ。

☆そうなんです。それには、早く住宅が建たないとだめなんです。

★でも、なかなかできない。

☆そう。自力再建できる人は、それでいいけど、それでも建べい率が60%になって、元の大きさには建てられないし。建ててる人もいるけどね。区画整理や再開発地区は、事業決定がされて、具体案ができないとだめだし。

★そんなところはさっさと建てちゃえばいいんじゃない？

☆ほんとはね。建てて、事業区域内で動けば補償がでるんだけど、その補償については行政側が最初にはつきりと言わなかった。

★なんでだろう。

☆コストのかかることは極力避けたいんです。それでなくとも、財政は逼迫しているし。

★なるほど、なるほど。

☆で、問題は土地を持っていない借家人。仮設に行った人は人で、大変不便で窮屈な生活を強いられていて、将来に大きな不安を持っている。



★仮設へのケアはどうなっているの。

☆行政やボランティアの協力でふれあいセンターをつくったり、自治会づくりなんかも進んでいる。とくに、仮設への日常的な支援はボランティアが頑張っているね。でも、戸数が多いところは大変みたい。

★みんな、元の所に戻りたいんだろね。

☆そういう人ももちろんいるし、自治会ができて地元の人たちとも繋がりができつつある所は、その地でやっという制約があって、それはこれからどうなるかわからないけど、前向きな面だけでなく、高齢者で仮設での死を

覚悟しているという話もある。

★哀しい話だね。

☆もとのまちに帰りたいたいという人たちの場合は、その要求を地元のまちづくりとどう結びつけていくのかが大きな課題です。

★なるほど。

☆また、借家人で仮設に行けなかった人もいる。そういう人たちは、地元で家を探すけど見つからない。苦労してどこかに何とか家を見つけて、元のまちに帰るためにまちづくりに参加している。

★そうすると、必要なのは公営住宅の建設。

☆そう、災害公営住宅のね。

★その進み具合はどう？

☆公営住宅の場合は、市や県が土地を買収しなければならぬ。しかも、まとまった土地が必要。売るという申し出に対して、すぐに受けないで、担当者が「隣はどう言うてます」と言ったという話もある。

★小規模でもいいからどんどん建てれば？

☆市の住宅局なんかは、建てるコストはあんまり変わらないのに、人手だけがかかるというんだ。

★効率が悪いと。

☆そう。彼らには、応用問題を解く力がない。自らがそ

う言っている。

★解く力がないのか、解く気がないのか。

☆両方だろうね。ただ、解く気はあっても、財政的な裏付けがないというのも事実。

★中央頼みだもんね。

☆そう、中央集権のデメリットが集中的・象徴的に現れている。

★まとまった土地がないということは、市街地には公営住宅は建たないということになる。

☆いくつかはできるだろうけど、大部分は西区や北区の不便なところになる。

★やっぱり、帰ってこれない。

☆そういうこと。しかも、家賃は前より確実に上がるから、それすら入ることが出来ない。災害公営の場合は、さらに入居条件があつて、例えば、事業区域内でその事業のために住めなくなる場合のみに、入居できる。

★災害で家が倒壊したり、消失したりしただけでは、優先的に入れないんだ。

☆その通りノ

★そこで、どういうことになるのかというと、市街地にできた公営住宅には、地元の人はいないし、土地の値段から高い家賃がつくと、ガラガラ。郊外にできた公

営にも人が居なくて、どちらもスラム化して、特に市街地、長田なんかはさびれ、仮設は永遠に残る。まちづくりは進まず、高齢化だけが進展する。

☆なんか、頭痛くなっちゃった。

★冗談ではなくて、そうなる可能性は十分にある。

☆どうすりゃいい？

★なによりもまず、国が金を出すこと。住専にあれば使うのに、政府は全く何を考えているのか。私有財産には補償をしない、何を言ってるのか。阪神・淡路というひとつの地域が今死に絶えようとしているんだ。ほっておくと、確実に都市が、まちが、そして人々の



生活が死滅する。

☆この大震災は単なる地方の災害ではないと。

★国の問題だということ。朝日新聞の論壇（一九九六年十一月十八日）に載った河上倫逸教授（京大・比較法文化論）の文章の一部を紹介しておこう。

『阪神大震災は本当に「地方災害」なのか。

死者六千人余、倒壊家屋四十二万世帯、鉄道・道路・港湾などの被害は激甚、公共建築物・経済システムの要となる施設の被害も甚大だ。地域生活圏も解体した。極め付きは消防・緊急医療体制の無力、ライフラインと呼ばれたものの脆弱性の顕在化。自衛隊法、都市計画法、建築基準法、労働法などの不備・無力の暴露……挙げればきりが無い。被害の物的規模のみならず、その内容・質においても、今回の大震災は日本国家の弱点を集中的な形で露呈させたのではないのか。

阪神大震災に「国家問題」として真摯に対応し、危機管理法制の構築と巨大災害に対する国家レベルでの復興計画と支援体制が常に想定され、実行されてゆかぬ限り二十一世紀の日本に未来はない。』

『今回のような災害が「一地方」のこうむった災厄だというだけでなく、また個々人の耐えねばならぬ不幸

だというだけでなく、日本国家の直面した国家的試験なのだという最低限の認識さえあれば、例えば単年度主義の財政運用など、制度を口実とした実質上の「地方の切り捨て」などできないはずである。』

『何故に、阪神の復興に対する国家的政策の決断がでないか。逆言えば、何故に、今回の巨大災害から教訓を引きだして長期的な視野に基づく危機管理・災害復興のための法制を緊急に整備しようとする動きが出てこないか。大震災は「過去」のことではなく、今後も続く「未来」の課題であるのだ。』

（みたに まこと・本学商学部教員）

連

載

日本中国 ことばの来往

ゆきよき

その 53

芝田 稔

静かなる周作人ブーム

戦後の周作人の動静については、これまでに本誌に二回(第80・98号)報告する機会があった。今回は中国で今起きている静かなる「周作人ブーム」の一端に触れてみたいと思うのである。

近着の『随筆』(九五年第六期、通巻一〇一号、広州、花城出版社)所収蘇葉の『初進苦雨齋』と題する一文が目についた。『初めて周作人の書齋に入る』という意味であり、事実は『初めて周作人の戦後作品を読んで』ということになる。

蘇葉氏は既に華甲を越え圓熟した文人であると思われるが、抗日戦争時期には正に多感な憂国の青年であったことが、この文章の行間から十分に察知できる。この文章は戦時中から抱いていた周作人に対するイメージと最近になって周作人の戦後書き残した作品に初めて目を通して得た感動との違いを、なに臆することなく、一個の文人としての立場で、その感想を述べているのが目新しいのである。

話せば恥ずかしいことだが、つい先頃になって初めて心静かに周作人(のもの)を少し読んだのである。こんな書き出しから文章は始まっている。つまり開口

一番、読んで意外にも自分にとってプラスになったこと、
教えられる点のあることに気付いたことを述べているの
であるが、具体的なことには触れていない。ただ自分が
これまで周作人に対して間違つた認識をもっていたこと
について次の二点をあげている。

その一つは、私は曾てある人から「魯迅(のもの)
は控え目にして周作人(のもの)」をしつかり学ぶよ
うに」と勧められたことがあつた。これが私に反感
をもたらせ、それは現実に対する逃避であり、降伏
ではないか。「何を好んで、そんな恥さらしの作品
など読めるものか」

第二は、私はいつこうに周作人を理解しようと思はず、
当然のことながら林語堂や梁実秋と同類だと思いつ
んでいた。林・梁のあのような取るに足らぬ洒落や
軽薄な自由な振舞いも、実は才子の賢い策に過ぎ
ず、底深い重厚な大家の気風などどこにも見られな
いと考えていたのである。

蘇氏は今になつて戦後他人の口まかせの、でたらめな
言葉を真に受けていたことを悔やんでいる。殊に教条主
義には反対していながらも、その害毒が自分の肌身にま
で浸透していたことに気付くのが遅かつたことを情なく
思うのである。



魯迅でさえ周作人「のもの」を読んでいた。そして「新文学運動以来、中国で最も優れた散文家に周作人がいる」とまで述べている。

周作人を見直してみる気持ちになったとはいえ、なお半信半疑で少しづつ、ゆっくり読み始めた。ところがどうであろう。いつの間にかすがすがしい境地に吸い込まれている自分に気付くのである。

周作人の庭は広々としている。飾り気がなく、有りのままである。たとえ人為的にまがきを巡らした、かやぶきの家、ほそどのや廊下がそこにあっても、それはみなその土地の精気と溶け合つて、ごく自然にそこで活き続けているといった感じである。

また

感情が激しく高ぶりつつ、激しい勢いで盛り上がることも無い、むしろかしい分りにくい文章でひからかすことも無いし、欧米のヒッピー風や王朝時代の古くささも無い。口語体でこれほどまでに書きこまれた散文が、賞賛されるのも宜なるかなである。

しかし同じ兄弟であり、同じように古い教育も新しい教育も受けて育つた魯迅と周作人とが、どうして全く違う道を進むことになったのであろうか。この疑問については先人たちの意見を参考にして縷々説明している。戦

前には郁達夫の『沈淪』を擁護して旧道徳、旧礼教に反対したほどの周作人がなぜ日本側に加担したのか。蘇氏の考えは「生計のため」だろうか。夫人の浪費癖によるものか？「義ハ周ノ粟ヲ食ラワズ」という故事を知らぬはずがない人が、とこしえの悪名をも顧みず「わが道」を進んでしまったのは、何故だろうと自問する。

これらの疑問や不可解なことが残るとしても、しかし周作人の文章の妙味に引かれて読みたい時に読み、思索し続けて行くであろうと結んでいるのである。

昨秋、周作人自選精品集の『飯後隨筆』（九四年九月河北人民出版社、上下七一六千字、九一一頁）を入手した。これは四九年一月南京の老虎橋監獄から仮釈放された周作人が北京の旧住所八道湾十一号に落着いてから後、上海の『亦報』（四九年一月二二日から二年半）と『大報』（五〇年一月から三月）に連載した自撰『飯後隨筆目録』計八八六篇とその後広州の夕刊紙に連載した隨筆計四九篇（これも本人が六二年七月に自撰した『木片集』だが、遂に出版されずじまいに終り、今回『附録』として公開されることになったもの）から成っている。『飯後隨筆』の編者陳子善によると、「近年來大陸の出版界および読書界には、大きくも小さくもない手頃な『周作人ブーム』

が現われており、周作人のさまざまな撰集が奇跡的に書店での販路を「復活」させている」ようである。このブームのおかげで周作人が生前に自ら編集しながら出版されなかった上記二集が、やっと日の目を見ることができたのである。ここに紹介した蘇葉氏も、この随筆集を読んだにちがいない。私はいま読んでいる。

漢字の遍歴 (6)

庚 (kang・geng、キョウ・コウ、かのえ)

この字形(図参照)について郭沫若は、商代の金文を例にあげて次のように解説する。

字形から観察すると、耳を揺り動かして鳴らすことのできる楽器で、その後の「鉦」に相当する楽器である。

この解説では、それを実証する文献資料もないし、また「鉦鼓」の鉦は、出土品が明らかにしているように、軍用で行軍中に兵を止める合図に用いる打楽器であり、耳が無いのが特徴である。とすれば「庚」と「鉦」は、全く別物であるといわざるを得ないのである。

では、この字は古来どのように解説されていたのか『説



楷書 書體	1-2期	庚	辛	壬	癸
	3-4期	庚	辛	壬	癸
甲骨文	5期	庚	辛	壬	癸
	春秋	庚	辛	壬	癸
銅器銘文	戦国	庚	辛	壬	癸
	小篆	庚	辛	壬	癸

この「注」には「庚とは陰氣万物を更めることを云う。ヲ象ル。」
 文』に尋ねる他はない。
 庚ハ西方二位ス。秋時、万物ハ庚庚（かたく充実したさま）トシテ実ヲ有ス。庚ハ己ヲ承グ。人ノ臍ヲ象ル。

万物はすべて秀実新成にあらたまる。李陽冰は人が両手で棒を立て、それを支えている恰好の象形文字と考えたが、真中の●印は「人のへそ」を示すものである」と解説する。

また康殷は『文字源流浅釈』の中で、甲骨文の字形からみて、これは古代の脱穀道具ではないだろうかと提案する。これは後世の「扇車」（庚箕のこと）とよく似ている。上部は漏斗を下部は胴体を象る。『説文』が両手で棒を立て、それを支えているように見える篆書に書いてしまったのが、解釈の分れ目になったのであり、奇想天外な説明をしてしまったのである、と結んでいる。

「庚」は天干第七を表示する仮漢字であるが、これを五方に配し、人体の各部と関連づけたり、陰陽五行、宇宙、天地、万物から生命に至るまで拡大解説をやつてのけた漢代の碩学振りがしのはれるのである。

なお「庚」は天干以外では先王、先妣の廟号に用いられていたのは先例と同様である。

辛 [sien・xin、シン、かのと]

郭沫若は、「辛は古代の曲刀（先の曲った彫刻用の刃物、いれずみに用いる小刀であり、又刑具にも使用された）を象る」と解説する。

康殷も郭説を支持しており「殷商時代に肉刑が行れており、周初では刑刀の一種も見られる。従つて辛は日常的には大小の鋭利な彫刻道具を示すものと解せられる」

因に『説文』は例によつて、解説を披瀝する。

秋時、万物ハ成熟ス（律書ニ云フ、辛トハ万物ノ新生ヲ言フ、故ニ曰ク新也）。金剛味（成熟ノ味ヲ謂フ也）辛ナリ。辛ハ庚ヲ承グ。人ノ股を象ル。

庚殷は更に「辟」という字を取り上げて殷周時代に行れた肉刑（からだに傷をつける刑罰。いれずみ、はなそぎ、あしきり、去勢等）に用いる道具である。近時陝西省から大量に出土したものに僅か二十種位の刃物がある。これは武器ではなく刑具の一種でありその象形が「辛」に近いと認めている。一部学者は「蛇頭剣」「匕形器」と命名し武器と認めているが正しくない。なお不明な点もあるが、その用途や性質は以上の通りである。

壬 (nien·ren、ニン・ジン、みずのえ)

郭沫若は「古代の石針を象つたもの」と推測する。

呉其昌は「両刃の斧」を象つた兵器である、と解説しているが、いずれもその証拠がない。また林義光は「壬」は即ち「滕」（春秋戦国時代の国名）の古代文字である、とするも確証無し。



『説文』

壬ハ北方ニ位スル也。陰極リテ陽生ズ（注 壬ハコレヲ言フ也。時ニ万物下ニ於テ懷任ス。……『釈名』：「壬ハ妊也。陰陽交リテ物懷妊ス。」故に易曰ク：「龍、野に戦フ、戦フトハ接スル也。人懷妊ノ形ヲ象ル。壬ハ辛ヲ承グ。人ノ脛ヲ象ル。」

康殷は「壬」の字形を紡績或は織布に関する一種の道具またはその一部分を象形化したものとし、さらに「紝」（機に用いる中央部のふくれた糸巻き）の古代文字ではないかと解説する。

癸 (kiuei・guei・gui、キ、みずのと)

まず『説文』の解説は次のとおりである。

冬時ハ水土平カニシテ揆度（癸ハ揆也、揆度トハ全体ヲ推シテ量る）可也。水四方ヨリ地中ニ流入之形ヲ象ル。癸ハ壬ヲ承ル。

羅振玉は甲骨文初期の字形——上方に三鋒、下方に柄有り——からみて「斨」の元字であろうと解説する。

呉其昌は字形からみて「矢」の象形文字で兵器を表していると解く。

饒炯は「葵」の古代文字であろうと説明している。いづれも確証はないが、近代の説明は概ね理解される。

藤堂明保は「刃が四方に出ている、どちらにも突けるほこを描いた象形文字で回転して量る意味から十干の最後の位。元にもどるイメージを表わす」また、ひまわり（向日葵）を例にあげて、日光のほうに傾く性質のことから「癸」と同類文字であることにも言及している。

以上で「天干」「十干」の常識的な解説を終える。「干」は「ほこ」とも「たて」とも両様の意味を持つ一種の武器の象形文字。次回からの「地支」「十二支」を終えて後「天干地支」の総括をしたいと考えている。

(しばた みのる・元文学部教員)

連

載

《研究余滴》

フランス詩の歴史（その二）

第二章 中世のフランス詩（その二 恋する騎士たち）

山村嘉己

1

近世以降の文学史区分に慣れたわれわれが犯しやすい過ちに、中世という四・五世紀にもわたる長い時代を一括して見ようとする姿勢がある。これだけの長さをもつ世紀を単純に一つの総体として見てしまおうとすることである。そのように中世を単数形でとらえるのは現実にはそぐわない見方であり、複数の形で中世がいくつも存在することを忘れてはいけないということでもある。《分権化され、有力な封臣たちに全権を掌握されていた肥満王ルイ六世（一〇八一―一一三七）の封建的なフランス

と、すでに近代的な行政機構をそなえ、中央集権化したルイ十世（一二八五―一三一一）の王政との間にはほとんどなんの共通点もない。日々の生活自体も大きく変化し、ひとびとのものの考え方はたえず移り変わり、言語自体も大きく変貌した。》（R・ファーヴル編『最新フランス文学史』中世（R・デュビュイ）だから、フランス詩の歴史をたどるにも、この混沌を一つにまとめて述べるのは非常に困難であることを十分認識した上で、それでもそこに大きな時代の流れを汲みとり、それを叙事詩としての《武勲詩》から、抒情詩を含む《宮廷恋愛詩》へとつなぎながら把握しようとしたのが今回の試みなの

であるが、一方、混沌とした世情のあり方から、それら
 が必ずしも一定の順序を経て継起的に出現したのではな
 く、ほとんど同時に現われた場合も少なくないことも
 はつきり指摘しておかねばならず、さらにまた、広いフ
 ランスで、中央集権は一四世紀ごろにはほぼ確立するとし
 ても、それまでの時期に、各地方々々では、まだまだ諸
 侯の力もつよく、分立した民衆の生活のなかでは、言語
 の多様性も含めて、《庶民噺》とでもいうべきもの（「狐
 物語」や「ファブリオ」など）が時を定めず随処に現
 われ、それらが後になり先になり交々作り出された場合
 も多いこともつけ加えねばならない。

しかし、そのように中世のもつ複雑な様相をしつかり
 とらえつつも、ここ第二章ではあえて《宮廷恋愛詩》グ
 ループとでも名づけうるものに焦点を当てて考えをまと
 めることにし、次回、第三章では庶民噺を中心に考察を
 進めることを約しておきたい。

2

《武勳詩》が、徐々に自らの力を貯えつつあった封建
 領主への忠誠と、異教徒を攻めるキリスト教十字軍への
 献身を誓った騎士たちの戦意を鼓舞する歌声であったこ
 とはすでに述べたが、同じ一―世紀の終りころ、ポアチ



エ、リモージュの
 辺りに、オック語
 で書かれた別の文
 学の徴候が現われ
 た。《この文学は
 短い歌からなり、
 その反宗教的な表
 現も、礼拝式の聖
 歌の歌いかたから
 来たもつと複雑な
 メロデーとよく
 あっていた。歌の
 主要テーマは恋愛
 関係であり、最初
 の有名な作者は、
 もつとも強大な領
 主のひとりに数え
 られるアキテーヌ

公ギョーム九世（一〇七一―一二二七）である》（『フ
 ランス文化史Ⅰ』G・デュビイ）が、これはロワール河
 以南という土地柄のせいだ、貴族社会も騎士たちも必ず
 しも軍事に心を傾けるだけでなく、もつと文化的な雰囲

気を持つていたことによるところが多いと思われるが、さらに逸してはならないのは、とくにこの地域での女性の地位の向上があった。前掲のデュビイの文によれば、当時は貴族の女性ですら、武器を持つことは許されず、地位をおとしめられ、娘時代は父親の完全な従属下におかれ、結婚のときは家同士の取引の材料として、夫の支配に委ねられ、未亡人となると息子や主君の意志で、別の夫を押しつけられることもあったという。その女性は宗教でも悪の源泉として斥けられ、独自の宗教生活も営むことはできなかつた。ところが一世紀になると事情は一変する。人びとの関心は宗教生活において、マグダラのマリアのような聖女像に向けられ、聖母のもつ役割が認められるとともに、女性へ語りかける説教師がふえ、また女性のための修道院が建てられるに到った。一二世紀初頭、もつとも有名であったフォントヴロー修道院は貴族の全女性が余生を送ろうと夢見た本山にすらなっている。この信仰上の変化とともに、たとえば、それまでほとんど男の自由であった離婚にも女性の発言権が認められ、さらに十字軍や旅行などで家庭を空ける夫に代り、家の財政権、邸の管理権なども女性が持つことが可能となるなど、女性に対する制限は大幅に緩和されることとなった。《婦人を尊敬することが騎士道徳の至上命令の

ひとつとなった。ことに宮廷や、もつと狭い部屋のなかや、《宿舎》^{ロジジ}で、当世風の城の大広間の片隅に、一一〇〇年ごろから親しい人びとの集まりのために設けられた談話室のなかで、鬭争と狩猟のあいまに意中の婦人と交際することが、貴族生活の楽しみのひとつとして加えられた。一一世紀末になると、いちばん開化の進んだサークルには婦人にとり入ろうとしている騎士の姿が見られる》(前掲書)に到ったのである。

3

前章でふれた新しい愛の歌を歌いあげ、方々に拡めて行つたのが「^{トルバドゥール}troubadour」(作詩・作曲する人)であり、かれらは「^{トルバドゥール}troubadour」(堅琴)を携えてフランス各地を旅するの



トルバドゥール

であつた。かれらの使う言語はオック語で、南仏の明るく自由な心情を大胆に語つたが、なかでもポアチエ伯・ギヨーム九世はフランス国王よりも広大な領地を持ち、《世にも雅やかな人物のひとり》で、最大の女蕩しのひとり》といわれ、愛

する女性をほめ讃える新しい発想のシャンソン (comso) を創出したとされる。その原詩をそのまま伝えるのは言語のせいで無理であるが、その一つの *Ab la dolçor...* (*à la douceur...*) の現代語訳を紹介してみよう。

新しい季節の優しい訪れに

森の木々は葉を繁らせ 鳥たちは

歌い出す みなそれぞれの言葉で

新しい調べのリズムに乗せて

だからみんなが自分の一番望むものに

自分の心を一杯開くのは当り前のことだ。

多くの喜びの源泉みなもとであるあの国から

待ちかねた使いも便りも来はしない。

だからぼくは眠ることも笑うこともできない。

そして一歩も前に進めないのだ。

ぼくらの和解が思いどおりになりそうだと

しっかりぼくが分るまでは。

ぼくらの愛も森のさんざしの枝も

みんな同じこと

雨に打たれ凍てつく夜が

その枝の上に打ちふるえている

明日が来て その緑の葉や小枝の上に

太陽が一杯の光をうち拡げるまでは

さらにまた思い起されるのはあの朝

ぼくらの諍いさかいが終りを告げて

かの女がぼくにあんなすこい贈物をくれた朝

かの女の愛と固めの印の指輪を。

どうか神よぼくに十分のいのちを与えよ

いつの日かかの女のかげにぼくの手を忍ばせるため。

というの**ぼく**は心配などしていないから

あの《美しい人》を遠去けようと**する**陰口など。

というの**も** **ぼく**は人びとのくりひろげる

悪口や影口のからくりなんか分り切っているからだ。

とにかく**ぼくら**は料理の仕方は心得ているんだ。

このような系譜をさらに受けつぎ展開させて行った人びとの名前としてジョフレ・リュテル Joffre Rudel、ベルナルド・ド・ヴァンタドゥール Bernard de Ventadour などが挙げられるが、この南国の早熟な春の訪れはやがて勢いを失い、だんだんと変化しながら北方の世界へと

受けつがれて行く。

4

そしてこの動きの重要な契機となったのは、ギョーム九世の孫娘アリエノールとフランス王ルイ七世との結婚（一一三七）であった。かの女はバリの宮廷に入ると多くのトルバドゥールを招き入れ、北フランスの《文明化》に大きな影響を与え、さらにルイ七世と離婚し、未来のイギリス王となるヘンリと結婚（一一五二）し、今度はロンドンの宮廷にまでフランスの文化の薫りをもたらすことになった。さらにかの女の二人の娘は自らの宮廷の女王として、文化の勃興保護に大きな力をつくすなど、いわゆる宮廷風の暮しぶりが広く求められるにいたったが、この根本の考え方がいわゆる *courtoisie*（優雅な礼節）と呼ばれるものである。

このような新しい考え方に基く微妙な男女関係を描いた詩人たちは、この北フランスの宮廷にあつては *トロワツヴェール* Trouvère と呼ばれたが、なかでも、かれらの先駆者といわれるクレチャン・ド・トロワ *Chrétien de Troyes*（一二世紀）の作品に描かれる騎士像はまさに宮廷風騎士道物語の典型をなすものであった。たとえば『ランカスロ 或は荷車の騎士』は円卓騎士ランスロとアーサー王

妃グニエーヴルの恋愛を描いたものであるが、拉致された王妃を救うためにはランスロは当時罪人を乗せるものとされた荷車にも敢えて乗り込んだり、騎士の試合でも王妃の命とあれば卑怯者のように振舞うことも辞せず、しかも王妃からは愛の不足をなじられる始末である。ここではかつて自らの主君に全生命を賭けても悔いることのなかった闘う騎士たちの情熱は自らの愛する女性、貴



荷車の騎士 ランスロ

投稿募集!!



婦人への献身に姿を変えたのであり、その愛は安易な充足を拒み、ひたすら苦しみを求める自己放棄の極致であった(後ほど一六世紀ス・ペインのセルバンテスの描く『ドン・キホーテ』はこの宮廷風恋愛のパロディである)。ただトルヴェールたちが先立つトルバドゥールと些か趣を異にするのは、トルバドゥールが南国の人そのままにたとえ不倫の愛であっても太陽の光のように輝きに満ち、歓びをげしく歌いあげるものであったのに対し、トルヴェールは徐々に女性の肉体への讚美よりは、自らの抑制を讃える方向に向ったことで、これは一般にキリスト教的道徳が大きく力を持つに到ったことを物語っている。

同じクレチャン・ド・トロワの大作『ペルスヴァル、或は聖杯物語』(一一八一〜九〇頃)にはその流れを十分に認めることができるだろう。

5

《恋愛は一二世紀の発明である》といった歴史家セニヨボスの言葉は有名であるが、これはいうまでもなく前章で述べた宮廷風の恋愛、オック語では *fin'amors* (至純の愛) を示すもので、たんに狂的な情熱に身を任せるのではなく、限らない精神の抑制とそこから羽ばたきを謳う愛を示すもので、これこそまさに中世の産物であ

短評を書いてみませんか?

最近一年間に発行された本の中で、自分がこれだけび人にも勧めたい、または、強く印象づけられた本の短評を原稿用紙(四百字詰)二、三枚に。

★ジャンルは自由、締切は毎月末。

★連絡先 〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生活協同組合本部3F組織部内

『書評』編集委員会

☎ 36817530 (直通)

☎ 36811121 (内線74355)

ったことは間違いない。不思議な奇縁で燃え上る二人の恋は、あらゆる試練に耐えてこそ不滅な輝きを持つものであり、最後には命を賭けてもその結びつきを成就するといったものがあらゆる愛の原型なのであった。いろいろな地方の伝説を集めて作りあげられた『トリスタン・イズー物語』（一二世紀ごろ）はその典型ともいふべきものなので、ここで少し詳しくふれてみたい。なおフランスではこの物語は『流布本系』といわれるベルール・ベロンのもの（一一七〇ごろ、原本に近いとされる）と『騎士道系』といわれるトマThomasのもの（一一七〇―七五）の二つが語られているが、ここでは一九世紀前半に中世学者ジョセフ・ペディエJoseph Bedierが精細な考証に基いてまとめあげた『トリスタン・イズー物語』（佐藤輝夫訳・岩波文庫）によつて解説をすることにした。

コルヌアイユの王マルクの甥でありながら、早くして父母を失う不幸を味わつた勇士トリスタンは、それでも不思議な運命の導きによつて伯父マルク王に拾われ、これを補佐する重要な役割を担つていた。ところが、伯父マルクの妃となるべき金髪のイズーを迎えに行く役を与えられ数々の障害を排してかの女を連れ帰る船にのせたのであったが、ここでかれらは期せずして素焼の器に盛

られた葡萄酒を飲み合つてしまふ。

「いやいや、それは葡萄酒ではない、それは情熱だ、激しい喜悦だ、無限の苦痛だ、それは死だった！」

トリスタンは心臓の血の中に香りよい花の咲く一本の根強い茨が根をはりひろげて、その肉体も、心も、欲求もすべてがイズーの美しい身体の方につよい絆でひかれるように感じ始める。しかし、イズーは自分の恩人マルク妃となるべき人、それを愛してしまふとは何という憎むべき忘恩の仕業であろうか。

一方、イズーはトリスタンが自分の伯父モルオールを倒した仇敵であることを知っていたが、その憎しみを越えてトリスタンを愛する心の高まるのを抑えることはできない。「恋人よ、あなたを苦しめるものは？」と問うトリスタんに、「あなたをいとおしとおもうわたしの心です」と答えるばかり。

「恋人は抱きあつた。美しい肉体のなかでは欲求と生命とが波うつていた。トリスタンは言った。

「さらば、死よ、きたれ！」

こうして、陽が落ちると、マルクの領土をさして飛ぶ

ように、前にもまして一そう速く走ってゆく船の上で、永久に結ばれた二人の恋人は、恋にすべてを棄てて互いに身をまかせてしまった。》

これが有名な《媚薬》の場面であるが、人間の意志を超えた不思議な運命の力と、それに悩みつつ逆らい、苦悩に悶えて愛を成就するこの恋人たちの姿にわれわれは



トリストアンとイゾー

今も変らぬ恋愛の原型を認めることができよう。

6

マルク王はそれと知らず浜辺にイゾーを迎えてその美しさに感動し、結婚まで決意するが、愛し合う二人はお互いの愛をかれに隠すことはしなかった。マルク王は怒りに燃えるが、結局は二人の逃亡を認めてしまう（この時のマルク王の心情もまた愛憎半ばして実に微妙な人間の姿勢を示している）。かくて《モロアの森》の二人の道行きが語られる。

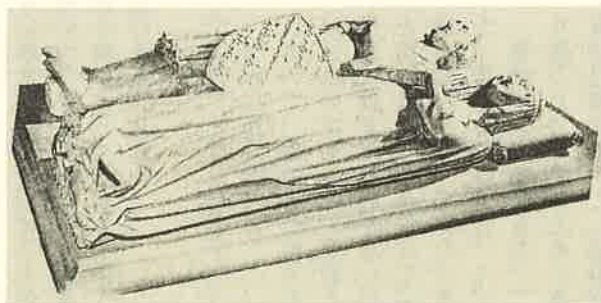
《人里はなれた森のなかで、彼らはあたかも勢子に追いつめられた獣のように、苦しみあえぎながらさまよって歩いて、前の日に宿ったところへもあえて帰ろうとはせぬのであった。食物といえは野獣の肉ばかりで、彼らには食塩の味が思い出されてならなかった。やせた顔には血の気が失せて、着物もいばらに引き裂かれ、ほろほろになっていた。それでも彼らは愛しあっていた。苦しまなかった。……

夏はすぎて冬がきた。二人の恋人は岩穴のなかに日を送った。寒さのために凍った大地の上では二人の寝床の枯葉のあいだに霜柱が立ったりした。けれど彼ら

の強い愛の力は、二人のどちらにも不幸を感じさせなかつた。》

こうした間、マルク王もまた苦しみ悩みながら、ときに森のなかを二人を探し求めてさまよっていた。ある日、かれは偶然、二人の眠っている場に行き合わせた。見ると二人の間には一振りの抜身の剣が置かれているではないか。一度、殺すべく剣をふり上げたマルクは、《二人のからだを隔てるこの抜身の剣こそ、彼らの潔白の証拠であり、保證であることに気づかぬものがあるうか。道ならぬ恋かけて愛しあつてきたものが、このように無邪気にどうして眠れよう》と思ひ直して、そつとその場を立ち去るのであつた。このため、後で気づいた二人の恋人は自らの意志でマルク王に許しを請う決意をし、悪人たちの多くの妨害を排除して、イズーは王の下に帰ることになる。

一方、トリスタンはさすがにもとに戻ることはできず、ギヤルの地のジランという心けだかい領主の下に身を寄せることとなつたが、ここでも髭の巨人ウルガンなるものを退治し、名声を高めながら放浪をやめず、ブルターニユにまで辿りつく。そして、ここで領主オエルを助けて武勲をたて、その妹、白い手のイズーと結婚すること



になつた。金髪のイズーを忘れることのできないトリスタンはいろいろな手段をつくして一度はかの女に会うことも出来たが、結局ブルターニユのカルエーにもどり、そこでの戦いに傷つき、もはや命も絶えんとするに到つた。最後に一目でもという二人の熱い思いは悪天候と、白い手のイズーの奸計によりあえなく果しえず、先に倒れたトリスタンの上に金髪のイズーも折重つて命を落すのである。

《黄金の髪のイズーは、東の方に向きなおつて神に祈つた。それから経帷子を少しまくつて、トリスタンの遺骸のそばに身を横たえ、口と顔とにくちづけると、からだとからだ、口と口とを合し、しっかりと遺骸を

抱き締めて、魂を天に還し、恋人を悼む悲しみのあまり、その傍らで死んで行った。」

その後、トリスタンの墓からは緑色の濃い葉のしげつた一本の花咲くいばらが萌え出て、イズーの墓の方へと伸びて行った。人々がいくら切つても萌え出てくるのでマルク王はついにそれを断ち切ることを禁止したという。

『トリスタン・イズー物語』に少し多くの紙面を割きすぎた嫌いだはないが、やはり此の物語は宮廷風恋愛詩 *Roman courtois* と呼ばれるものの代表作であるのでそれだけの価値は十分にあると思う。さらにとどめとしてベデイエの研究に序文を寄せたG・パリスの一節を紹介しておこう。

「……この物語の終始を一貫して活気づけている精神、あたかも二人の主人公の血管の中を『愛の飲料』が馳せめぐるように、物語のすべてのエピソードの中を馳けめぐる精神、すなわちすべての掟てを超越する愛の宿命という理念である。……その理念がここでは苦悶によって純化され、死によって聖化されたように思われるだけ、それだけ多くのひとびとの心情を奪い去ったのであった。人間感情の常に見る脆さ、瞬時も

とどまることなく変わりゆく幻が蒙る繰り返し繰り返される幻滅。そうしたもののさ中にあつて、最初から離れがたなく不思議な絆でつながりつめられ、あらゆる艱難辛苦のあらしに打たれても怯まず、引き離されても、引き離されてもしのび寄り、終には最後の永遠の抱擁の中であなたに運び去られるトリスタンとイズーという一組は人間の理想形体の一つとして現われて来ている。」

(やまむら よしみ・本学文学部教員)

おいてけぼり

——宮本輝試論

XI

芝田啓治

十二、「おいてけぼり」その社会に対して

(4) 「無社会」——中原中也の場合——

中原中也は、太宰治より二歳上の明治四十年（一九〇七年）の生まれで、太宰同様大正デモクラシーから政党内閣期に向う頃、青年時代を過ごしている。石川啄木や太宰が社会と自らとの距離や位置に少なからず躰き、悩み、踰いたのとは対称的に殆ど社会とは対峙せず、長い髪を風に靡かせて飄飄と歩き、人生を過ごしていったのである。その因が何処にあるかを追い求める事が、中原中也と社会との関係性を見極める事になるのではないだ

ろうか。

中原中也は、長州毛利家の一族、吉敷毛利の家臣の家に生まれた。中原家は、明治に入って医業を営み、中也の父謙助は陸軍軍医長を務めた厳格な長州陸軍閥に繋がる人物であった。陸軍軍医と云えば、森鷗外の事が直ぐ頭に浮かぶが、父謙助は鷗外の下で医学を学んでいた事もある。又、中也という名を鷗外の手によって名付けられたと自ら吹聴していたらしいが、勿論これは中也一流の言い草で、真実ではないと思われる。しかし、二代続いた医師、特に父は少佐まで進んだ陸軍軍医上がりの医師、かつ明治時代の長州で、長男として生まれた中也に

は生誕と同時に敷かれたレールが横たわっていたのである。三代目としての。

少年時代の中也は、このレールの上を家や親の庇護のもと歩んでいかに違いない。生活の一つ一つに、更には遊びや友だちに至るまで親の目が光り、脱線する事なく歩み続けたのである。しかし、少年時にはさほど気に掛からなかったのだから、自意識が芽生え世界が広がれば、それへの反発は当然の事ながら大きく膨らんで行くものなのである。

中也は、期待通り県立山口中学校に十二番という優秀な成績で入学している。将来、政界・官界・軍人への道、それもエリートへの道を歩み始める事となり、親の期待も一層大きくなったものと思われる。が、しかし、その頃より文学への興味を抱き、短歌を投稿し、読書に耽り、徐々に学業を怠っていった。成績の方も七月の一学期末には八十番、更には二年進級時の学年度末には百二十番と下がる一方で、親も家庭教師をつけたり、長期休暇時には思想匡正を目的として大分の西光寺へ送り込むも、結果的には歯止めとはならず、遂に恐れていた事が現実のものとなった。大正十二年三月、中也は落第をしたのである。社会の関わりで言えば、特に学生時代に於いては一つの烙印なのであり、本人は自業自得として仕方な



昭和40年6月、中原家から50メートルほど離れた高田公園に建てられた中也の詩碑。小林秀雄の筆になる「帰郷」(「これが私の古里だ……」)と、大岡昇平の碑文が刻まれている

いが、長州での旧家かつ長男の失態としては最悪のものであったろう。社会へ通じる確実なレールがこの場で一度脱線してしまうのであり、父謙助は断腸の思いで中也を京都立命館中学に転校させたのであった。この時点で、故郷へ繋がるレールも又壊れてしまうのである。しかし、中也はこの親の気持は理解出来ず、脱線したままレールには戻ろうとはその後一生しなかった。

「日本では親の愛が多くては、子供は勉強が出来ない。詩人は尚そうだ。」(中原中也「精神哲学の巻」)

そして、この大正十二年より中也の放蕩がスタートを切るのであった。京都に場所を変えても、学業には一向に身が入らず、翌十三年四月より長谷川泰子と同棲生活を始めるのである。十七歳の中也と三歳上の泰子という幼いカップルは、幼いがゆえに互いに傷付け合い、そして破局を迎えるのであった。それも、友人の小林秀雄の許に泰子が去るといふ、中也にとつて耐え難い結末として。

「私が女に逃げられる日まで、私はつねに前方を睥睨することが出来てゐたと確信する。つまり、私は自己統一のある奴であったのだ。若し、若々しい言い方が許して貰へるなら、私はその当時、宇宙を知つてゐたのである。……然るに、私は女に逃げられるや、その後一日々々と

日経つ程、私はただもう口惜しくなるのだった。」(同「我が生活」)

その後、中也は上京した。親の許可を得るためには、勿論表向きはレールに戻るという事が前提であり、学問のための上京といった形態をとるのであった。中也も親の弱味を知り尽していたという事であり、切なさすら感じさせられる。

彼の学歴は次のようなものである。

大正十五年 日本予科文科入学 9月には退学

昭和五年 中央予科編入

昭和六年 東京外国語学校専修科仏語部入学



昭和八年 同校修了

中也は、二十六歳になるまで学生生活を表面上続けているのである。それは、詩作を続けるため、そして東京にいたため、そして郷里より仕送りを得るためであった。

十六歳で郷里を離れ、脱線した中也が二十六歳になるこの歳まで郷里に甘え、放蕩を続けるのである。その間に父謙助が死去するも、本来喪主を務めなければならぬ立場の中也は帰郷が許されなかったのである。正しくこれは、社会との関係性を逸脱している結果であろう。

「大正十二年より昭和八年十月迄、毎日々々歩き通す。読書は夜中、朝寝て正午頃起きて、それより十二時まで歩くなり。」(同「詩的履歴書」)

全くと言っていい程、中也は社会との接点はないのである。求めようとせず、ただ風の吹くまま歩き続け、自らの心の中に巣くった「喪失感」「倦怠感」を見つめるだけなのである。それを追い出せず、それを叩壊せず、ただ心の内に秘めつつ歩く人生なのである。昭和八年十月迄その生活が続いたとあるが、それは結婚をして生活が一担変化するかに見えたのであり、又変えようと試みたのかも知れないが、三十歳でその人生を閉じるまで基本的には精神的放蕩は続いたのである。中也にとって立ち止まるという事は、恐怖であったのかも知れない。彼

の詩には、意味もなく歩き回る詩が目立つ。それが、彼の人生だから当然なのだが、一担歩を止め、後ろを振り返ったり、この先を思うと心が引裂かれんばかりに痛むのであった。

「これが私の故里だ

さやかに風も吹いてゐる

心置なく泣かれよと

年増婦の低い声もする

ああおまへはなにをして来たのだと……

吹き来る風が私に云ふ」(同「帰郷」)

立ち止まれば、風さえ中也を嘲笑し、批判していくのであった。東京で生活を送るとは言え、全く社会との接点を持たず、求めず生きた中原中也は名声や権力とは最も遠く懸け離れた位置にいたのではないだろうか。詩人は神に一番近い人間」という言葉があるが、中原中也も世間の縁や欲と離れた所で歩んだのであり、その事が社会や時代とも懸け離れさせ、彼が特異の位置に結果的に存在し得たのだろうか。それゆえ、彼の詩は極めて新鮮な感覚で生み出され、新しい感性で編まれたがゆえに、かえってどの時代にも通用するような詩が誕生したのである。今、我々が彼の詩に接しても、新しい感覚で読めるのはそのためである。



昭和初期の湯田温泉

「ああ 家が建つ家が建つ
僕の家ではないけれど。

部屋にゐるのは憂鬱で

出掛けるあてもみつからぬ。」(同「はるかぜ」)

この詩にも、実社会で繰り返される生活を全く異質な地点から眺め、創造する事の難しさや感激を冷かすかのような無感覚ではあるが、しかし、決して乾いてはいない危ういバランスの上で社会を見ているのである。

「ああ十二時のサイレンだ、サイレンだサイレンだ
ぞろぞろ出てくるわ、出てくるわ出てくるわ

月給取の午休み、ぶらりぶらり手を振って

大きなビルの真ッ黒い、小ツちやな小ツちやな出入

口」(同「正午」)

自分自身とは、全く関わりなく遠く離れた規則正しい実社会を蔑んでいるのでもなく、勿論憧れるのでもなく、小さな風景の一つとして眺めているのである。これが、中原中也の実社会に対する位置なのではないだろうか。即ち、無社会という位置なのである。しかし、一担自身自身の事となれば主張は続く。

「生活が拙いといふことは、断じて芸術が拙いといふことではない」(同「芸術論覚え書」)



「とにかく私は苦勞して来た。苦勞して来たことであつた。そして、今、此処、机の前の自分を見出すばかりだ。じつと手を出し眺めるほどのことしか私は出来ないのだ。」(同「わが半生」)

と切ないまでの自己主張である。中原中也自身、自らの位置を知り尽していたと言えよう。敷かれたレールを一担逸脱した時、咄嗟に自らの人生を察したのであり、詩人としての人生のみを追い求め、そして生きたのである。それ以外の一切を求めず、ただ求めた時も勿論人生の中で一度や二度あつたであろう。例えば愛、例えば家庭。しかし、それらも中也の前から一つ去り、二つ去り、決して戻つては来なかつた時、彼は孤独な詩人で生きる

より他に成す術はなかつた。

「きらびやかでもないけれど

この一本の手綱をはなさず

この陰暗の地域を過ぎる。」(同「少年時」)

「幼時より、私は色んなことを考へた。けれどもそれは私自身をだけ養つたことで、それが他人にとつて何にもならないことを今知つてゐる。

ああ歌がある、歌がある。進め。」(同「精神哲学の

巻」)

(しばた けいじ・本学経済学部卒業生)

連

載

日韓条約体制の教育指向

——在日韓国・朝鮮人子女の教育問題ノート

22

梁 永 厚

1

戦後日本の政治史のなかで一九六〇年代前半の大事件というところ、二つとりあげることができる。その一つは一九六〇年、改定された日米安全保障条約の国会批准をめぐる、批准に反対するデモが連日国会へ押し寄せ、ピーク時には三〇万人にもなった。そしてデモ参加の学生樺美智子が警官隊の弾圧をうけて国会の南門前で死亡、米大統領アイゼンハウアーの訪日中止、などをともなつた六〇年安保である。もう一つは一九六五年、日韓基本条約の国会批准をめぐる六〇年安保と同じような規模の

攻防があつた日韓国会である。

さて最近、日本と韓国との間に領土即ち竹島（韓国側の呼称「独島」）問題が再発しているが、それは日韓基本条約の締結交渉のなかで帰属問題を決着つけることをせず、「紛争（竹島を特定せず）は両国政府が合意する手続きに従い、調停によって解決をはかる」という交換公文を交わすだけにとどめたことに起因している。これまで韓国側は島を占有し交換公文のいう紛争でない主張し、日本側は韓国による不法占拠であると抗議をしてきた。しかも帰属問題の解決は先送りにし、日韓関係が緊張したときには、双方ともナシヨナリズムをもりあげ



る材料の一つにしているのが実情である。領土問題を曖昧にして日韓基本条約が結ばれたのは戦後二〇年も経つてのことであり、北朝鮮との間には国交樹立問題が緒についたような、つかないような状態（現在中断）で成立の見通しは霧の中だといえる。

今回は日韓の国交樹立交渉即ち日韓会談の経過と、日韓基本条約の締結により日本当局が執った在日韓国・朝鮮人処遇、とくに教育問題について触れようと思う。

戦前の日本の指導者たちが、国体ニ天皇制を守ることにごこだわった結果、ポツダム宣言受諾のタイミングを逸し、原爆被爆国となつたばかりか、北緯三八度線（日本

の首脳部がポツダム宣言の通告を受け早々に受諾をしていたらソ連の対日宣戦布告は防げた。だがソ連軍の参戦となり八月一三日には北朝鮮上陸が行なわれ、一五日の終戦となつた。そして日本軍の武装を解除する米ソの分担ラインとして引かれた）による朝鮮半島の南北分断という隣人の民族的不幸を道連れにした。

そして太平洋戦争の敗北の日から三日目の一九四五年八月一七日、日本の内閣制度発足以来はじめての皇族内閣を組織した東久邇宮首相は、同日全国民に向けラジオ放送で「わが国と中国との過去における悲しむべき問題をこの機に一掃し、互いに勝敗を問うことなく……」と述べ、わずかに中国にたいする日本の侵略に触れたが、三六年にわたり植民地支配をした朝鮮への言及はどこにもなかった。このことは当時の日本の戦争指導者にとどまらず、今日なお日本人一般の意識の中に色濃く引きつがれているといえる。

日本の指導者が天皇制を守ることにこだわり、道連れにした朝鮮半島の南北分断の現実を日本人が実感したのは、多分に一九五〇年六月二五日に起つた朝鮮戦争のときであり、国交を結ばねばならない隣国同士であるという意識を日本人が持つようになるのは、一九五三年に韓国側が李承晩ライン（今日の竹島ニ独島問題に関連する）

を設け、日本漁船を拿捕しはじめたときだといえる。

韓国側からすると独立して一年後の一九四九年、GHQへの窓口として東京に駐日韓国代表部を設置するようになったとき、当時の大統領李承晩が「日本とはあと二〇年ぐらい経過したあとで国交を開くのが賢明である」と触れたのが初めてであった。しかし朝鮮戦争が起ったことから、GHQの日本を朝鮮戦争に間接加担させようとする意志がはたらき、李承晩の二〇年後に国交を開くといった腹案は、一九五一年一月の釜山談話をもつてくつがえされた。それはアメリカの対日講和特使ダレスの訪日に焦点をあわせた談話で、「連合国の対日講和会議に韓国も参加」「日本との国交樹立」を望む内容であつ



た。

そしてGHQ外交部長のシーボルトの斡旋で、サンフランシスコ講和条約の調印（一九五一年・九・八）を済ませ翌年独立することになった日本と韓国との間に、国交樹立交渉即ち日韓会談が開かれることになった。その第一次予備会談は一九五一年一月一〇日から開かれ、以来一四年間のマラソン会談となった。会談は日本側代表のあいづく「植民地支配は施惠的なものであつた」とする植民地支配肯定発言により決裂をくりかえしながら、ようやく会談成立へと向うのは、一九六五年二月に基本条約交渉妥結のために訪韓した椎名外相が、はじめて不幸だった両国の関係と歴史に触れ「遺憾なことだつた」という発言によつてである。

椎名外相の「遺憾」表明後、会談は急進展し日韓基本条約^{〔1〕}および付属の漁業・請求権・法的地位（戦前から在日する朝鮮人の待遇問題）、文化財関係の四協定の調印が、一九六五年六月に東京で行なわれ、同年一二月に双方の国会批准を経て、条約の発効即ち日韓条約体制が始動したのである。なお同体制は日米安全保障条約および韓米安全保障条約とトリプルされ、東北アジアの安全保障同盟的性格を帯びるものでもあつた。

(1) 日韓基本条約は、英文を軸に双方が自国語に訳しているの
で、今日まで解釈のちがいのまままきいている条項(第二条)が
ある。日本語訳は「一九一〇年八月二十二日以前に大日本帝
国と大韓帝国との間で締結されたすべての条約及び協定はも
はや(英語は already)無効であることが確認される」(傍線
筆者)、韓国語訳は傍線部分を「すでに」にあたることばをあ
てている。つまり日本語訳は日韓基本条約の締結による旧条
約はもはや無効という植民地支配肯定論を含ませており、韓
国側は旧条約は脅迫によるもので当初から無効という意味で
すでにと訳している。

2

日韓条約体制は北朝鮮に関する諸問題について、日韓
両政府の協議即ち韓国政府の意向をとりいれて対処して
いく体制で、在日韓国・朝鮮人にたいしては直接におよ
ぶものであった。同体制下における在日韓国・朝鮮人処
遇は、法的地位協定に基づいて行なわれてきた。つまり
在留資格については時限的な永住許可制(協定第一条)
を施き、韓国籍を申請要件とするいわば政治的選別を行
ない、永住許可者には日本国からの退去強制基準を緩め
る「特典」(同第二条)、即ち朝鮮籍のまま在留する者と
の間に処遇差別をし、教育については「妥当な考慮を払

う」(同第四条)と、戦前同様の「同化教育」の軌道を
敷くものであった。

法的地位協定第四条(教育条項)の具体的な内容は、
同協定についての「合意された議事録」において、「日
本国の公立小学校又は中学校へ入学することを希望する
場合には、その入学が認められるよう必要と認める措置
を執り、及び日本国の中学校を卒業した場合には、日本
国の上級学校への入学資格を認める」となっている。こ
の「妥当な考慮」という「施恵」「待遇」の本質はいか
がなものだろうか。当時の政治家や政府刊行物から、そ
れをみることにしよう。

文相経験の国会議員・灘尾弘吉

永住権を得た韓国人子弟が希望するならば日本の
公立義務教育諸学校の教育を受けさせるのは当然で
ある。しかし朝鮮語で朝鮮民族としての教育をして
いる各種学校を正式に認可することは応じがたい
(『毎日新聞』一九六五・三・三〇)。

『文部時報』(一九六五年八月号)

これら韓国人がわが国の社会によく適応した調和
的存在となるかどうかは、わが国社会の安定・進歩
のために問題となるが、韓国人自身にとっても、そ
の生活の安定充実が得られ、幸福な日々を送れるか



どうかのわかれ道である。彼らがわが国社会に調和した存在となるか否かの基礎は教育によって培われるので、彼らとしては進んでわが国の学校に入るようにし……

『調査月報』（一九六五年七月号）

彼我双方の将来における生活の安定と幸福のために、これらの人達に対する同化政策が強調されるゆえんである。すなわち大いに帰化してもらうことである。

以上は文相経験者一人とか、政府刊行物の執筆者に限定される考え方ではなく、日韓基本条約を結ぶに際して

の政府をあげた論理であり、法的地位協定の教育条項の本質とするものであった。つまり教育の理念が倒錯されて、韓国・朝鮮人子女を日本人化する同化教育を当然とし、朝鮮語により「民族教育」をする自主教育機関は存立を認めず同化教育へ収斂していく、というのである。

朝鮮語による「民族教育」機関は、そのほとんどが北朝鮮系の朝鮮学校であった。日本政府は日韓条約体制の始動が本決まりになりだした一九六五年四月、文部省内に「在日外国人教育連絡会」を設け、在日外国人学校即朝鮮人学校規制問題の検討にのりだした。検討の軸としたのは「外国人学校を各種学校として認可し、免税援助をしているのは妥当か、一部外国人学校で反日教育をやっているが、このような例が他の国にもあるか、又これを放置しておいてよいか」などであった。なお内閣調査室からは「この問題（朝鮮人学校問題）は文教問題としてとりあげるより、閉鎖の実力行使をどうするかというような治安問題としての処理を考えねばならない」（『調査月報前号』）といった所見も示された。

そして地方自治体の首長にたいし「朝鮮人学校を各種学校として認可することは望ましくない」という文部次官通達がなされ、さらに朝鮮人学校は「反日教育」をしている、といったキャンペーンを『時の課題』『調査月報』

などの政府刊行物、与党機関誌『自由民主』、一部マスコミを通して展げ、日本人の民族排外感情を煽り、朝鮮人学校抑圧の下地がつくられていった。

一方の朝鮮人学校側は、抑圧される危機意識から「民族教育」にたいする日本社会の理解を求め各種学校の認可を得るとりくみを展げることで対抗をはかった。当時、学校設置者の法人格と各種学校の認可を受けていたところは、一九四九年の朝鮮人学校一斉閉鎖措置後、当局と朝鮮人学校側が妥協して発足した東京都立朝鮮人学校の十三校をはじめとする各地の公立朝鮮人学校（分校名のところもあつた）が、教員採用および民族教科の時間数について折れ合いがつかず、朝鮮人の自主運営に移管されるときに、法人格と学校認可を得た以外の朝鮮人学校（一九五六年発足、東京都小平市）ほか多くが無認可で、いわば塾も当然といった実状であつた。これらの無認可校が一斉に法人格および学校認可を取得する運動にとりくむのである。

大阪においては、法人格と学校認可を得ていたのは旧大阪市立西今里中学校（朝鮮人生徒のみ収容）から自主移管をしていた中大阪朝鮮中級学校だけで、他の十三校は無認可校であつた。学校関係者は一年余りにわたつて府民に「民族教育」の理解を求める署名運動および府会

議員、府私学審議委員への陳情を重ねた。その努力が報いられて府議会総務委員会の認可促進議決、私学審議委員会の認可を可とする答申を経て、自民党籍をもつ佐藤知事から一九六七年四月に認可の決裁を得たのである。

とくに朝鮮学校の認可問題で世論を沸かせたのは、朝鮮大学の認可問題であつた。朝鮮大学校は設立時に認可を申請し各界へ陳情をしていたのであるが、文部省の意向・通達に副つて都の私学審議会にもかけられないままにおかれていた。朝鮮大学校側は日韓条約体制の始動にたいする対応から、各界への陳情を再開し世論に訴えていった。訴えをうけて世論を盛りあげる契機の一つをつくつたのは、一九六六年一月に開かれた関西地方の国公立立大学学長（一四名、参加者総数は元学長、学部長、教授など二九名）懇談会である。以後関東地方の国公立立大学学長懇談会、日本学術会議会長の認可促進声明、学者・文化人の署名、東京都議会をはじめとする各府県議会および市町村議会の「朝鮮大学校認可問題にたいする請願」の可決、と世論が盛り上がり、多くのマスメディアも認可促進の立場でことを報じるようになった。だが文部省の通達に縛られた東京都私学審議委員会は、都知事からの諮問にたいし、認可を留保すべきであると答申し、認可は阻まれようとした。しかし当時の美

濃部知事（革新系無所属）は、一九六八年四月、知事もつ認可の権限を用いて問題を決着させた。

大阪・東京の両知事による朝鮮人学校認可の決裁は、民意の尊重即ち民主主義に基づいた地方自治の発揚であつた。両知事に做つた格好で朝鮮学校が所在する道府県の知事も、認可問題については文部省通達よりも地方自治に傾いたことはいうまでもない。

こうした推移から文部省は、日韓条約体制の教育指向を達達行政では果しえないとみて、都道府県知事の権限である各種学校とその経営をする法人格の認可権を、文部大臣に移すべく、学校教育法一部改正案（一九六六年



四月立案）を国会へ提出するのである。同改正案は従来
の学校教育法の各種学校条項（第八章 雑則）を各種学
校と外国人学校の二つの制度に分け、後者は朝鮮人学校
の規制を定めたもので、当時は外国人学校制度の創設と
もいわれた。

外国人学校制度の内容は、まず目的を外国人の教育活
動が「国際的な友好親善関係の増進に役立つとともに、
その自主的な教育活動がわが国の利益と調和を保ちつつ
発展することができるようにするため……」（改正法案
第八二条の一）としている。この条項はつぎの第八二
条の一三のいわゆる反日教育・国益を害する教育の禁止
条項の前提である。第八二条の一三は次のように規定さ
れている。

外国人学校においては、わが国若しくはわが国民に
対する誤つた判断を植え付けて相互不信の念を起さ
せ、わが国の国際的な友好親善関係を著しく阻害し、
又はわが国の憲法上の機関が決定した施策若しくはそ
の実施をことさら非難する教育その他わが国の利益を
害すると認められる教育を行なつてはならない。

この規定を中核に、学校の認可権は文部大臣がもつ。
これまでの各種学校の資格は法施行後一年までとする、
一年経過後は資格を剥奪し無認可校となる。認可申請が

不認可となった場合は教育の中止命令を出す。認可校については学校の立入検査、設備・授業の変更命令を出すことができる。命令に違反したときには閉鎖命令を出す。学校設置者、校長、教員の資格規制、罰則など、といった、いわば教育関係法というよりも治安法といった内容の条項を並べた法案であった。

この法案は一九六六年一〇月の国会提出にはじまり、若干の手直しを加えながら、六七年、六八年と三次にわたって提出されたが、北朝鮮系の人たちの反対運動、同運動への日本の各界各層の人たちの支援により、三次とも審議未了で廃案になった。だが文部省は「威信」を保つために、それまで大学入学資格を与えなかった一般各種学校にたいし、一定の教科内容を整える条件で入学資格を与えるなどの規定を軸に、いわゆる「格上げ」をして、各種学校資格の朝鮮人学校と切り離す専修学校制度を一九七六年に設けることで対処した。

日韓条約体制が指向した在日韓国・朝鮮人子女の教育は、公教育を受けることを希望する子女を施惠的に受け入れ同化教育をする。北朝鮮系の学校は規制法をつくり抑圧・閉鎖をし、その子女も同化教育へ収斂していこうというのであった。それらは何れも当事者の主体的な反対運動、地方自治の発揚、世論などに屈したかたちとな

り、とくに規制法制定の矛は収められたといえるが日韓条約体制の教育指向は変わらないままだといえる。だが一九七〇年代以降には、人権と国際感覚に冴えた教師たちによる公教育の中の外国人教育運動が起り、数々の実践をつみあげ、教育行政の腰を上げさせる営みが進められている。さらに朝鮮学校への地方自治体の援助、JR他制度的差別を設けていることへの改善、朝鮮学校スポーツ選手にたいする中体連、高体連の開放などが行なわれるところへきた。朝鮮学校側も、これまでの教育についての内省と在日に即した教育の創造、日本社会にも開放された学校化など、未来指向の教育を一層めざさねばならないと思える。

(ヤン ヨソフ・文学部教員)

お詫び

前号二〇頁下段、「天皇は、」以下空白となっておりますが、次の傍線部分を筆者校正で落しておりました。お詫び申しあげ訂正致します。

「天皇は、ひきつづき国体護持問題を次のように『独自録』で述べている。」

一七・八世紀日本の政治思想―伊藤仁斎(一)

蘆田東一

一 はじめに

一七・八世紀の日本の政治思想のついで、伊藤仁斎の思想をもつてその代表とするのは、多くの人が意外に思い、その妥当性を疑うと思う。江戸時代の政治思想といえ、丸山眞男氏の『日本政治思想史研究』によつて、特にその政治思想が注目された荻生徂徠があげられるかあるいは、江戸幕府のいわば公認思想となる朱子学を講じた林家の思想が考えられる。

またE・H・ノーマンは、江戸時代の儒教仏教などの支配的な思想に対して徹底的な批判を試みた安藤昌益を



『書評』編集 STAFF募集!!



とり上げ、日本の専制権力と抑圧に対する反抗を擁護する思想を展開した人として紹介している。日本における封建支配に対するさまざまな抗議があったという証拠は多いが、それを意識的に批判した著書として安藤昌益の著書をあげ、紹介している。ノーマンは昌益と多くの東西の思想家との比較をしている。「古代ギリシアのエピクロス派、一七世紀イギリスのレヴエラーズ、一八世紀フランスの哲学者と百科全書家」とを比較してその思想の世界的水準といったものまで考えている^①。とくにイギリスのレヴエラーズと重農学派として有名なフランソワ・ケネーとの比較を詳しくしている。昌益の批判は鋭

くて根底的である。老子の自然主義と似ているようであるが、老子の規範についての不徹底さに対しても厳しい。まさに人類の共通遺産としての昌益の著書である。

確かに、そこには社会のあるべき姿に対する根底的な問いかけはあるが、一方では、その社会に至る戦略論のない「あるべき社会論」にもなってしまう。その意味で「ユートピア」論に通じる問題がある。

しかし現にある社会の説明にすぎないということは、朱子学に対してよくなされる批判である。もちろんこの批判ないし非難は朱子学に対してだけなされるものではない。また丸山眞男氏によって近代的政治学的思惟の先

『書評』は私たちによる文化形成のための印刷メディアです。あなたも『書評』を創ってみませんか。

「雑誌」に興味のある方、思想・文化活動をやりたい方は、『書評』編集をはじめ、講演会や映画上映のSTAFFになってみましょう。

私たちは、いつでもあなたをお待ちしています。

★連絡先 〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生活協同組合本部3F組織部内

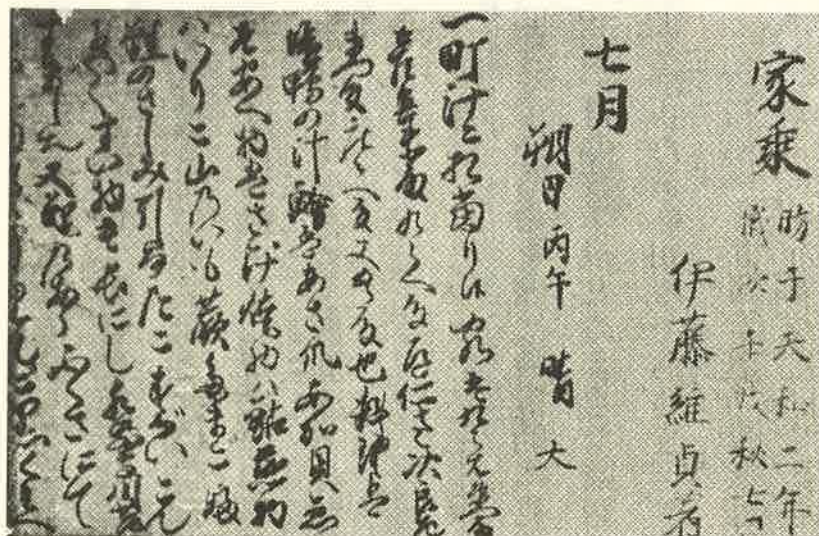
『書評』編集委員会

☎ 36817530 (直通)

☎ 33881121 (内線 74355)

駆と評価されている荻生徂徠も実は現実社会の、あるいは、現実権力の説明なのである。しかしそのことはさして驚くことでもなくあたり前のことかもしれない^②。このことも本当は問題なのであるが、さらに徂徠の政治思想評価について混乱を加えている要素に、徳川幕藩体制への理解の問題がある。しばしば徳川幕藩体制を絶対主義あるいは前期絶対主義と考えてしまっている人もいる。そのひとたちにとっては、権力の説明思想であれば、絶対主義の思想としてうまく納まるのかもしれない。そういう楽観主義の人には徂徠の「鬼神」についてのほんの一節を読んでもらうだけでよい。明治時代にも、徂徠や宣長の思想の痕跡が見いだされるとすればそれは、徂徠や宣長が新しかったというのではなくて、明治時代が絶対主義の諸特性を備えてはいても、東洋の伝統的な専制支配の負の遺産を払拭できていないというだけなのである。それは明治の近代化の様相の問題であるし、江戸期からの思想史の問題としてもある。

伊藤仁斎の政治・法思想の分野での従来の評価については問題がある。仁斎についてはむしろ政治と無縁であるということに評価すべきところがあるかのように語られてきたからである^③。つまり生涯仕官しなかつたか、京都の町衆、例えば尾形光琳の一族や角倉家との姻



戚関係であるとか、学問以外のところで権力との距離に共感を得ている面もある。もちろんそれ自体興味をそえられるところではあるが、仁齋が、支配体制の説明イデオロギーとしてあつた儒学を、人と人との結合から展開される「社会」の結合原理として、読み替えてしまったことほど重要なことはないのである^④。

注① E・H・ノーマン『忘れられた思想家』上・下（『岩波新書』）

② そのことが徂徠を現実主義的な政治思想を展開する人だと考えてしまった人がいる。現実的なことと言えば、『政談』では、およそとんちんかんな提案をしているに過ぎない。

③ 石田一良著『伊藤仁齋』（人物叢書）

④ すでに内藤湖南『近世文学史論』（『内藤湖南全集』第一巻所収）二九頁に「……豈に興国の気象、伊氏に索き、而して承平の習気、物氏に蓄まる賦。」とある。

二 伊藤仁齋をめぐる日本政治・法思想史研究の傾向

(一) ながらく、日本は中国文化圏にあつた。多くの文化的影響を中国より受けている。しかしながら、本格的に日

本の政治権力の中枢が儒家思想を受け入れたのは一七世紀に入つてのことである。もちろん漢字文化や経書などなどの伝来は、倭の五王の上表文とか、五経博士の渡来によつて知られる。当然に、儒家思想は日本の様々な分野に根をおろすことになるが、意識的に儒家思想を国家秩序のよつてたつ思想としたのは一七世紀のことになるのである。六〇四年の聖徳太子の憲法一七条には、「論語」からの引用もあるが、法家の思想家である、商子、曾子、韓非子などからの引用が多く目につく。

一七世紀日本の政治権力者徳川氏が依拠した儒学は朱子学である。宋代の儒学は、仏教・道教との対峙を経て、宇宙論的秩序体系を確立していくが、その典型が朱子学としてある。日本でそれが導入されたことについては詳しい研究が必要であるが、禅宗が媒介となつて導入されたものではある。

朱子学は、幕藩体制秩序を説明する理論的体系でもあつた。それは宋代儒学の仏教との交渉の中でその宇宙論と対決し切れずに儒学内部に大極論を中心にして持ち込まれてきたものである^①。もつとも日本に於ける朱子学など宋学の受容については、絶対的・彼岸的理については拒否的ないしは消極的のまま、秩序イデオロギーを再構成する形で受容している。

童子問

予往年環為諸友所推顧自蘭門以詩學者後
此四方之士歸湊日盛問道不已予雅時叩兩端
以獨為然學者多徂於舊聞率於意見卒無以得
孔孟之正宗不高則不樂不奇則不悅歌常而喜
新舍通而取遠予深聞焉乃綴輯鄙言以為答問
之資且以明郭忠之正傳亦不得已之心也宋政
陽子及輔漢鄉氏有考詩童子問予亦命之以童
子問要明非所以告大方也皆元祿辛未春正月

その宇宙論的秩序イデオロギーとして確立したことが東アジアからさらに南方の国々に於ける儒学の勢力を拡大した一因のようである。

ところが日本では、その一七世紀にその朱子学に対するラジカルな批判が始まるのである。それは、宋・明の儒学に対して『論語』『孟子』あるいは経書に拠って考えようとすることとで古学派と総称される。山鹿素行・伊藤仁斎・荻生徂徠をはじめとする人達である。

現代日本を代表する政治学者の丸山眞男氏は、彼の青年期の作品であるがしかし代表作である『日本政治思想史研究』において、幕府が採用した朱子学あるいはある

いは幕府が召し抱えた林家の学問と、それに対する古学派の中でも古文辞学を唱える荻生徂徠の思想を対置し、「中世的自然法的秩序から作爲的契約的秩序へ」という構想のもとで古学派を捉えようとする。朱子学の世界観を克服しようとする作爲的契約的秩序に、日本の近代的政治思想の拠って立つ精神を見ようとしたのである。その徂徠的世界への階梯として素行・仁斎の思想を位置付けている。丸山氏は、徂徠の思想に朱子学的思惟様式の解体を個人的道徳と政治の非連続性を見いだそうとしている。しかし、個人的道徳と政治の非連続性あるいはまた、公と私の分断こそが政治的思考であるというのは、不思議な論理である。この不思議な論理は現代の日本の現在の政治家が依って立つ論理である。しかもそのような丸山の分析方法がある程度成功したのが素行と徂徠についてである。ある程度といったのは、やり方はとにかく、素行と徂徠の思惟の特性の一面を明らかにし得たからである。しかしながら仁斎はその視角からではとうてい捉えられない。丸山氏も「仁斎はもっぱら儒教倫理の理論的分析に力を注いだから、政治論の方面では彼に多くを期待することは出来ない」という。しかし、啓蒙期の思想家の新しい政治思想そのものが同時に倫理思想でもあったのである。倫理思想もない政治思想などあるは

ずがないのである^②。このことも特に仁齋の政治理論に注目した理由のひとつである。

仁齋の「人外無道、道外無人」という人間関係を離れて真理はないという考えは、支配のレトリックとしての呪術と対立し、超越的な「公」とは相容れない思想である。つまり丸山氏の言う宇宙論的秩序思想に一番対決した思想は仁齋の思想なのである。

丸山氏が徂徠に見出した「公私の分裂」は「公」に対する批判の契機を失い、なおかつその「公」が徂徠の蘇生する「呪術」と結合する時、さらに合理性を欠如した宇宙論的秩序思想として登場することになる。丸山氏は徂徠の「公私の分裂」に近代的な「政治的思惟」を読み込もうとするのであるが、分裂した時、「公」は「私」から離れた秩序思想としてしか存在しなくなっている。しかも、徂徠の五(六)経の世界への遡及と呪術的世界の認知は、水戸学の「国体論」成立の大きな要素となる。この「国体論」は、朱子学の変種ともいべき秩序思想であり、日本の偏跛なナシヨナリズムの表現である。日本の近代に大きな影を投げかけることになる。

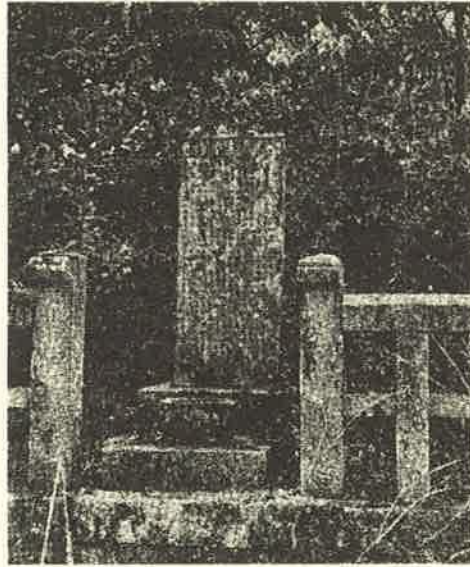
注① 狩野直喜『中国哲学史』三五二頁以下など参照。

② マキヤベリの政治思想でもしかりである。その意味では徂

徠・素行にも言えるかもしれないが、丸山はそうは考えない。もつとも丸山氏は「念のために一言するが、筆者は政治が倫理と無関係だと言ふのではない。ただ政治と倫理が如何に結合するかが問題になる為には、まづ政治の固有法則性が見出されることが前提だと言ふのである。政治が倫理と無造作に連続している間は、本来の意味の政治学の成立の余地はない。」とは言う。しかし、この問題の立て方が戦時下の日本的である。「政治の固有法則性」「本来の意味の政治学の成立」は若き丸山氏の視角である。東大法学部「緑会」懸賞論文やカール・シュミットに対する関心もこれである。様々な民族主義的イデオロギーと倫理におおわれた時代の発言で、倫理の世界として考察されていたものへの「政治学」的な切り込みは、魅力的であった。しかし、その中核概念である「作為」の主体は神話的伝説的「聖人」なのである。

(二)

先に触れたが伊藤仁齋は、京都の堀川の東側の私塾で教育・研究活動をした人で、当時官学的な位置にあった朱子学の根底的な批判を開始し、古義学を提唱した儒学者である。政治理論に関しては消極的で、道徳・倫理思想家であると言われていた^①。仁齋を京都町衆と規定し、



伊藤仁齋墓

町衆としての思想形成の視点を提起された三宅正彦氏は、「仁齋における実践は意思の自律から導き出されるのではなく、外在規範の受容に帰結される。」「同一の原理を指標とする朱子学的思惟は、内的確信の優位によって、現実批判の原理として機能しえた。これに対して同一の

原理の拡張を指標とする仁齋の思惟は、論理構成としてはるかに進歩した形態でありながらも、現実秩序肯定の原理として機能するのとどまった。」とされる^⑧。これは、仁齋の思惟の特質を、所与の絶対化、対立の捨象、それに同一の原理の拡張と把握された三宅氏の研究の研究の結論の一端なのであるが、現実秩序肯定という評価である。この評価は先の注でみた先人の「興国の気象、伊氏素き、承平の習気、物氏に蓄まる歎。」という評価に対立するものである。三宅氏が特質としてあげておられる三点は仁齋が人的関係に重きを置くことに関係することであり、同一の原理の拡大とは、それに孟子の四端の「拡充」説も含むかとも思われ、それを「所与の絶対化」「対立の捨象」「同一原理の拡大」とされては、いかなる思想も干からびてしまふ。

仁齋によって明確にされた、あるいは、仁齋によって構成された孔子の思想史上の意義は、自然的・呪術的世界から、人間的・合理的世界への転換である。転換された世界は、道徳的・倫理的意味でのみの人倫的世界の構想ではない。その世界は、自然的・呪術的世界の〈畏れ〉に対応した「礼楽」の世界ではない。人的関係において、意思の最高の共通性、あるいは共有性としてある仁が、「忠信」によって達せられる時にこそ、「礼―法」の実現

があり、それが、政治のあるべき姿ということになるのである。

仁斎の政治・法についての思惟を、日本近世初期にあらわれた特別な表現としないで、儒学の歴史における異例の天才による展開としないで、世界史的な観点から、あるいは、現在の私たちの地点から、その距離を考えれば、法・政治論の方面でこそ、多くを期待しうる理由がある。仁斎が、孔子の思想を、自然史的・呪術的世界から、人間的な合理的世界の原理として構成したとき、そのときには、法・政治思想への展開がなされている筈だからである。その仁斎に反撥し、呪的世界の承継としての礼楽を唱えた思想に、「社会契約」思想や政治理論を読み込むことは滑稽であるばかりでなく問題である^③。しかし仁斎には社会契約への回路がある。仁斎の思想は徂徠には承継されていない。徂徠が、孔子の思想の思想上の画期性を否定して、「孔子の道は先王の道なり」として、孔子は先行する三代の聖人のおこなった道の「講師」にすぎないというが、その先王の道は、徂徠の言述にも見られるとおり、自然への畏れをそのままに受け、呪術を礼とした道である。徂徠の思想には、丸山眞男氏が言う、自然的秩序に対抗できる「作為」はない。呪術的礼を「政治思想」へずれこませることに道を開いただ



伊藤仁斎寿像（伊藤東涯筆）

けである。

それでは、仁齋の法・政治についての思想は、その後、どのように発展され得たのだろうか。仁齋の思想については、政治についてはほとんど述べるところがなかったとする研究が多いが、しかし、一方では、仁齋を幕末の国粹主義的国体論の源流と考える研究もあるのである^④。その理由は、仁齋の宋学の否定によって理説が破られ、徂徠の『弁道』に見られる礼楽制度論が整えられる、そのことが会沢正志齋『新論』の諸社の祭祀の義をもたらすとするのである^④。驚くべき図式化であるが、良く考えれば丸山『日本政治思想史研究』にも、見受けられる傾向なのである。

そのような解釈が成り立たないということは、徂徠と是对立的な思想であることを理解することでわかる筈である。すなわちそもそも、徂徠には仁齋の法・政治についての思想は継承されていないのである。仁齋は法制度を絶対化しない。法制度は「民心」に拠ると考えているからである。そこで「民心」の共通性の強調と同時に、その歴史性も強調する。そのことが、伊藤東崖の『制度通』という、いわば比較法・法制史研究と実現していくと考えられる。仁齋の学問の発展として、仁齋の『古学先生文集目録』『漢の文帝肉刑を除く論』につらなるも

のとして、それはあると考えられる。

仁齋の近世思想史における屹立したあり方を「法」についての叙述から見てもみようと思う。今まで、仁齋の政治論を論じようとしてなされたものは、結局は、いずれも仁齋が政治に消極的だったか否定的か、要するに政治に積極的でない政治性を述べている。あるいは法・政治理論の内容ではなく、次節でみるように、朱子学批判ということの政治的意味を見ようとしているのである。

仁齋の人倫的世界の展開は、道徳・倫理思想としてだけでなく、実は法・政治理論の問題として理解されてこそ、その思想的意義を見ることができるといえる。

注① 例えば石田一良著『伊藤仁齋』(人物叢書)

② 三宅正彦「仁齋学の形成——同一の原理」と『弁証法的

思维——』(『史林』四八一—五) 後、同著『京都町衆伊藤仁齋の思想形成』としてまとめられる。

③ 丸山眞男著『日本政治思想史研究』なお『叢書』ヒストリーオブ・アイディアズ』16(ポール・フォリエ他、野一郎・小笠原弘親他訳)の文献参照。

④ J・R・マキューアン『伊藤仁齋の宋学否定の歴史的意義』(『思想』五〇九、一九六六・一一)

(あしだ とういち・神戸山手女子高校)

■短評■
テロリストのパラソル



株式会社 講談社ノ定価一四〇〇円
藤原伊織

この作品は、江戸川乱歩賞を受賞し、その後直木賞も取った作品である。一つの作品で二つの賞を受賞するのは非常に珍しいことであるらしい。そのため、この作品はかなりの話題作として、現在も好調な売れ行きを見せている。

しかし、必ずしも売れている本が名著である、というわけではない。この作品も、ストーリー展開の強引さが少々鼻に付く。アルコール中毒

のバーテンダーである主人公が、ある日新宿中央公園で起こった爆弾テロに巻き込まれる。彼は全共闘時代の爆弾事件による容疑を掛けられており、過去を隠して居場所を転々とする、逃亡者の生活を送っていた。中央公園の爆弾テロの被害者には、二五年前に彼がともに戦った同志、そして彼が過去に愛した、たった一人の女性がいた……。

ストーリーの展開は、主人公とかつての友人達との間の二五年間の空白部分を埋めていく過程にスポットを当てて行われる。だが、次第に明らかになってくる友人達の過去が、余りにもドラマティックすぎて、現実感が感じられないのである。この作品も一応ミステリーということになってるので、内容について詳しくは触れないでおくが、恐らくクライマックスを劇的なものにする為に、作者が気負い過ぎたのではないだろう。

うか。この辺の強引さが、作者がハードボイルド小説初挑戦であるところを伺わせる。

基本的にハードボイルド小説というものは、緻密なストーリー構成を楽しむものではない。それよりは、主人公をはじめとする登場人物のキャラクター描写を楽しむものである。会話や行動の描写を通じて、主人公の人生観・行動様式などをどれだけにじみ出させているかが、ハードボイルド小説の評価基準であると思われる。

ハードボイルドの巨匠と言われているのが、米国の作家、レイモンド・チャンドラーである。彼の人気作品にフィリップ・マローウを主人公としたシリーズものがある。淡々とした文体の間に、マローウの、ひいては作者であるチャンドラーの世界観がにじみ出ている。ハードボイルド小説が好きな人間は、この世界観に

短評募集!!



引かれるのである。人生に対する考
え方、スタンスと言ったものに共感
を覚え、憧れるのだと思う。

日本では、ハードボイルド小説は
まだ馴染みの薄い分野である。その
中でこの作品は、日本のハードボイ
ルド小説の分野が発展するきっかけ
となる一作なのではないだろうか。

ざりざりまで無駄を削り取った
シャープな文体。地の文で語られる
主人公の教訓に満ちた独り言。ウイ

スキー、ホットドッグ、拳銃といっ

た小道具たち。作品中には、そのよ
うなハードボイルドの必須条件が随
所にちりばめられている。こういつ
たハードボイルド小説特有の文体を
味わうのが、ハードボイルドの醍醐
味ではないだろうか。

ハードボイルド小説は、本格派ミ
ステリーが好きな人達からみれば、
「邪道」である。そこには、天才的
な推理力を持った探偵も、完全犯罪

を狙う狡猾な犯人も登場しない。そ

こに描かれているのは孤独な主人公
がぶつぶつと独り言を言いながら事
件を解決していく姿である。そう
言った寂しい主人公の生き方に共感
を覚えながら、酒を傾けつつ小説を
読むのが、ハードボイルド小説の正
しい読み方だと、私は思う。

(渡辺 昇・社会学部二回生)

短評を書いてみませんか?

最近一年間に発行された本の中で、自分がこれは
ぜひ人にも勧めたい、または、強く印象づけられた
本の短評を原稿用紙(四百字詰二、三枚に)。

★ジャンルは自由、締切は毎月末。

★連絡先 〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生活協同組合本部3F組織部内

『書評』編集委員会

☎ 3 6 8 1 7 5 3 0 (直通)

☎ 3 6 8 1 1 2 2 1 (内線 7 4 3 5 5)

短評

今年には宮沢賢治生誕百周年という年にあたり、テレビや雑誌でもその生涯や多くの作品が改めて注目されています。生前にはほとんど知られることのなかった彼の詩や短編などは、現在では国語の教科書にも載せられ、宮沢賢治の名とともに多くの人の知るところとなっています。

「注文の多い料理店」や「セロ弾きのゴーシュ」そして「銀河鉄道の夜」といった作品は誰もが一度は読んだ



■短評■ 銀河鉄道の夜

宮沢賢治著
角川文庫／定価三九〇円

ことのあるものではないでしょうか。その中でも「銀河鉄道の夜」は、宮沢賢治の生き方を支えた思想・信仰・教養をもっとも強く投影した作品であるといわれています。多くの人に読まれ、読む人それぞれに違った印象をふんわりと残す不思議な作品です。

この「銀河鉄道の夜」は、宮沢賢治の生前に発表された作品ではありません。「注文の多い料理店」「セロ弾きのゴーシュ」等二十編余りの作品だけが二冊の単行本として公刊されたものであり、完成作品・発表作品なのです。その他多くの作品と同様に「銀河鉄道の夜」は未発表作品の一つで、自筆の原稿をそのままの形で本としたものを現在私たちは手元において読むことができるという訳なのです。「銀河鉄道の夜」は原稿が何枚かなくなっていたり、字が空白のまま抜けていたり、書き込みがされ

ていたりする未完成・未定稿の作品なのです。宮沢賢治の手によってもっと推敲がされていたら、また違った印象の作品であったかも知れません。未完成なままでこれほど人を魅了し続ける「銀河鉄道の夜」は童話です。大人の読む童話と評する人もいます。大学生がこれを読んだとしても十分に楽しめると思います。

銀河鉄道は、大人になろうとする少年の心の中にいつでも走っています。社会的責任を自ら背負おうとせず、無理に背負わそうともされないう現在の「大学生」は、銀河鉄道に乗っているジョバンニなのです。

風変わりな人と出会ったり大切な友人を突然失ったりしながら、ジョバンニは自分のために、母さんのために、そしてみんなのために幸福探しをすることを決意し銀河鉄道を降りるのです。

子どもの世界から見ていると大人

が住んでゐるのは全く別な世界に映るけれども、本当は一つのもので、周りの大人たちの自分に対する見方が変わるだけのことであり、人として社会的存在であることを自覚し、自立して責任を果たしていくことが銀河鉄道を降りる資格なのです。

大学生生活は十人十色で、それぞれ違った過ごし方があると思います。

多分、夢の中の鉄道で同じところをぐるぐる回り続けるようなことをしていても「大学生」に対して大人たちは何も言いません。でも、銀河鉄道をジョバンニとともに降りて、あらゆる人の幸せについて真面目に考えることだってできるはずですよ。

「世界全体が幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」という宮沢賢治が残した言葉は、「大学生」にどんなふうに理解されるのでしょうか。この言葉は、世界の人々への祈りでした。貧しい農民の間に混

じって決して望みを捨てず、農業技術の改善に尽くした宮沢賢治の思いを農民の子供たちにもわかるようにして、早く幸福が訪れるようにと「銀河鉄道の夜」を始めとする多くの作品を書いたのです。

宮沢賢治が、その一生を捧げた明治末期から昭和初期にかけて、日本はまだまだ田畑だらけの農業の国でした。百年という歳月は日本の国を世界のどんな国よりも豊かできらびやかな国に変えてしまいました。そして「大学生」は銀河鉄道に乗ったままぐるぐると同じところを回り続けています。しかし「大学生」である以前に社会とは切っても切れないところで人として存在していることは、百年前も今も変わらないことなのです。

「大学生」になつたからといって人生をひっくり返すような何か決定的な変化もなく、毎日が同じことの

繰り返し。つまらないと感じているけれども一体何をしたらいいのやら。どんなことをすれば、あらゆる人の幸福になるのか。そう考えるとき、「夢の中の鉄道ではなしに本当の世界で歩くこと」は決して難しいことではありません。それは今自分のいるところから始まるのです。人は思いついただけではできないことも多くあります。でも努力を重ねて何度も失敗しながらできるようにすることも意外に多くあるものです。

まず自分が本当にやりたいことは何か。そして、今の自分に何ができるのか。またそうすることが自分のため、あらゆる人のためにどう生かされるのかを考え、何でも実際に自分の体を使ってやってみることなのです。夢の中の鉄道を降りるために、本棚の隅にある「銀河鉄道の夜」をもう一度読んでみてはいかがですか。

《投稿》

「特集 戦後五〇年『特集にあたって』」について

金原 淳

『書評』一〇七号を見た時、戦後五〇年の特集とあって、軍服と鉢巻きの写真があるのを見た時、三島由紀夫と盾の会の写真だと思ってしまった。そして、編集者は戦後を象徴するものとして三島事件を考えているのかと思った。

ところが、「特集にあたって」——このカギ括弧の意味は良くわからない——を見ると「まずもって考慮しなければならないこと」は「かつての戦争をどうとらえるのかという点である」とある。だから「戦争」が問題の中心だったのである。だから表紙の写真は「戦後」の写真ではなく「戦争」だったのである。だが編集者は戦

争をテーマにするのか戦後をテーマにするのかわからな
いままに終わっている。

しかしこの編集者の混乱は、私が「混乱」と整理した
ものである。内容からは編集の意図はまったく窺えない。
表紙の写真とこの文（「特集にあたって」）で、この編集
者が「戦後五〇年」という言葉の氾濫に素朴な反撥を感
じているということはわかる。その内容は「反侵略」ア
ピールだけのようである。

次に問題の一部を羅列する。

一、特集するというテーマについての把握がない。調査
もない。その意味でも「戦後五〇年」ブームに自分が

乗っていることに気がつかない。「戦後」にしても「戦争」にしてもおびただしい研究と文献がある。それらを二顧だにしていけない。あるいは、実は、おびただしい研究と文献と整理があることについて認識がない。

二、この文（「特集にあたって」）では、「反侵略」のアービールだけで、編集者自体に、『書評』として特集するだけのコンセプトはみえない。

三、この文（「特集にあたって」）と特集の文が、どういふ関係になるのか、この文の中には言及がまったくない。

これらのことは致命的な問題のようである。「特集にあたって」としながら、掲載の文がおよそ、この文（「特集にあたって」）とは無関係な内容であり、このことについて何の言及もないのに編集の名を名することに、何の躊躇も覚えないのは確かに致命的である。

さらに付随する多くの問題を指摘することはできる。どうしようもないように見える。しかし、本当はこうならない方法は簡単なのである。格好だけを何かのまねをしなければ良かったのである。「戦後五〇年」と言わなければ良かった。「特集にあたって」など書かなければ良かった。ホンのすこし、自分にとって戦後とは何かを考えてみれば良かった。自分たちが本当に問題にするこ

と、知りたいこと、感じたことを核にすれば良かった。それから寄稿者や読者とのダイアローグがはじまるのだが、要するに、無知や幼稚さからくる傲慢さがやりきれないのである。だから内容がまったくおもしろくないのである。

謙虚に・真摯に、だからこそ大胆に問題に迫ろうとする姿勢と意欲があれば、そこに言うところのダイアローグが成り立つし、それこそが『書評』の本来持っていた意図であり、意味であり、期待される場所であり、醍醐味なのである。その意味では、他のメディアとも基本的には変わらないのである。ただ『書評』では、それが端的に現れることができるし、またそうであった。無知から来る傲慢か、傲慢からくる不毛か知らないが、ささやかでもまとめて公刊する立場になれば、一種の特権的地位にしていることになる。そのことについての自覚も編集者には欠けているようである。教師が教壇でしゃべることの特権について自覚的であれという以上に、そのことについての反省と自己点検がないことには、訴えかけることはできないのである（大林宣彦の伊丹十三襲撃事件の際のコメント参照）。

継続して刊行されていること自体、畏敬されるべきことである。さらなる発展を願うからこそその要望である。

読者のコーナー

前号の「書評」第一〇七号の一部に、アンケート葉書を添付しました。その中で、返送されてきたアンケートの中の感想・質問等の部分を「読者の声」として本号から掲載していきたいと思ひます。

編集委員会では、今後とも継続してアンケートを行い、編集活動の参考としていきたいと思ひます。「書評」に関する感想や質問・意見等がありましたらどの様な形で結構です。ので、編集委員会のほうまでお寄せ下さい。

梁永厚「被爆問題と天皇制」の二十頁下段左側三行の空白はなぜ。これは、戦前の検閲による削除と同じでないか、と疑問が残る。次号で明快に説明してほしい。日本の出版界は今でも菊印が最大のタブーになっている明証だ。天皇制護持の呪縛が被爆を誘引した、というのは達見だ。次号でリプライすべきだ。

小山仁示「大阪大空襲」も失言大臣たちに熟読させたい。内地で空襲原爆を受けた市民の方がプロの軍人よりも戦争の実態を知っている。この指摘は正しい。外地の航空隊主計将校など、敗戦まで空腹も恐怖も知らなかった、と述懐している。日本人の敗北は朝鮮人の「解放」五〇年前の戦争の性格をみごとにみせた猪飼野の体験。小山さんを代表とする日本の庶民の実態だ。

K. F

尾崎先生の「戦後教育五〇年考」を読んだら、日本の戦後教育に関する知識をたくさん知っていた。

F. K

小生の関心から言えば、文学、評論、芸術の五〇周年回顧も欲しい所です。

T. K

「戦後教育五〇年考」は興味深いものであったが、このテーマに関してもう少しページをさいて取りあげてもよかつたのではないだろうか。

N. N

このような骨太な書評誌を一大学生協が出されるということに正直驚きました。

H. N

以前の「書評」誌と異なつて、表紙が一般雑誌のようにツルツルになつたなあということと、なつかしい思いがした。

特集も面白く読めた。特に尾崎ムゲン氏のは興味深く読んだ。

今後の編集活動を期待します。

S. N

充実しています。現場からの発想と多様な人々の発信をさらに重視してほしいと思います。

M. H

三谷真氏の「震災と復興」、このテーマに関心を持つ者として期待して読みましたが、すべて一地域では解決できぬ問題ばかりですから、さらにそこまで論じていただきたいのです。

R. M

宮崎義一先生の講演録は現在の日本経済がおかれている状況がよくわかり、とてもためになりました。

T. K

戦後五〇年の特集をよませていただきました。とかく、専門外のことにとくくながちの身なので、「複合不況」etc、勉強になりました。

色々考慮してあるので、編集のご苦労がよくわかりました。益々のご活躍をお祈りします。

K. O

充実した内容だと思ひます。

T. O

国民経済の黄昏―「複合不況」その後を特に興味深く読ませていただきました。

S. H

すばらしい企画だと思ひます。学校教育の学校しか知らない、大学の教員の教育にもなると思ひるので専門馬鹿から脱しバランス感覚をもつた先生と学生で構成する学園にするため、うんと広いジャンルの記事を集めてください。

A. K

様々な分野の研究、書評が掲載されており、興味深く読ませていただきました。

T. K

きわめて意欲的なねらいに合致した内容で質・量ともに問題提起としては読みごたえのあるものです。次回以降のより充実されますことを楽しみにしています。

H. A

投稿募集!!



短評を書いてみませんか?

最近一年間に発行された本の中で、自分がこれに
ぜひ人にも勧めたい、または、強く印象づけられた
本の短評を原稿用紙(四百字詰)二、三枚に。

★ジャンルは自由、締切は毎月末。

★連絡先 〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生活協同組合本部3F組織部内

「書評」編集委員会

☎ 36817530 (直通)

☎ 36811121 (内線 74355)

戦後五〇周年特集を興味深く読ま
させていただきました。

G. K

特集をどんどん読んでください。

Y. I

特集戦後五〇年は大変興味深く読
ませていただきました。

K. A

宮崎義一氏の話は、秀逸。むずか

しいことをやさしくいえる高レベル

の学問をみた思いがする。小山仁示

氏の視点もさすが。

高レベルで読みやすい文章―講話

などを期待しています。

T. M

広い範囲にわたる論評でおもしろ
くよみました。

M. K

宮崎先生の講演録及び沢井氏書評
とくにおもしろく読みました。
(匿名)

興味深く拝読致しました。

H. T

今後の日本にとって重大な課題を
提起するものとして、「国連五〇年
と日本」を評価します。

S. N

編集後記

『書評』一〇八号をお届けします。今回は、新人生に向けた読書案内を企画しました。

大学での「読書」というものは、それまでとは違った側面を持つようになります。入学するまでは、読書は純粹に読書のためのものであり、「読みたい本を読む」という要素が強かったのですが、大学に入ってから「何かをするため」に読む本の量がだんだん増えてきます。レポートを出すためにこの本だけは読んでおかなければならないとか、授業の中で興味をもった事柄をさらに詳しく知るために参考文献を読むというように、目的意識的に読まなければならない本が出来てくるのです。

大学は「自由」が尊重される場です。研究活動においても、自分から積極的に行動しなければ、何も得ることはできません。そのような自主的な研究活動の基本は、やはり本を読むことだと言えます。だから、「読まなければならない本」が増えていくのです。

とはいえ、自分の周囲が「読まなければならない本」ばかりになつてしまうと、かなりの苦痛を感じます。時には、自分のために「読書のための読書」を考えることも必要かもしれません。自分の感覚にぴつたりと合う本に巡り合ったときの喜びは、何物にも替えがたいものがあります。新入生の皆さんが、在学中にそのような本に巡り合えることを期待します。

(松本)



102号



- 〈特集〉 読書案内
- インドで僕も考えた
 - アメリカ小説を読もう
 - 読書三タイプ
 - 「二要因理論」
 - 読書のススメ
 - 気軽に読める本三冊
- 〈連載〉
- 芝田 稔 / 山村嘉己 / 芝田啓治

105号



- 〈寄稿〉
- バリソンとは何か
- 〈連載〉
- 梁 永厚 / 山村嘉己 / 芝田啓治 / 芝田 稔

103号



- 〈特集〉 石尾芳久追悼特集
- 法史的方法について新風
 - [海南政豊・海南律例の研究] [海南政典の研究]
 - 支配の理論からの近世社会の切開
 - 1975年 被差別部落論の理論的地平
 - 「大政奉還と討幕の密勅」を読む
 - 牧・天皇制論は克服しえたか
 - 石尾芳久教授と西洋法史
- 〈連載〉
- 芝田啓治 / 梁 永厚 / 池田浩士 / 山村嘉己 / 芝田 稔

106号



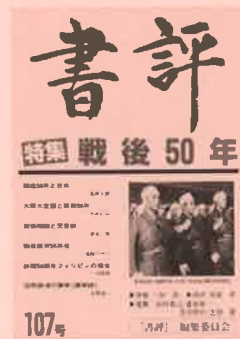
- 〈特集〉 読書案内
- 法学へのきっかけ
 - モンテスキュー著「法の精神」
 - 文系学生のための数学的発想のススメ
 - 「山の人生」
- 〈寄稿〉
- 林羅山の法・政治思想と幕藩体制(1)
- 〈連載〉
- 梁 永厚 / 芝田啓治 / 芝田 稔 / 山村嘉己

104号



- 〈特集〉 読書案内
- 本への接近
 - 「本が読めない」
 - 二番街のパフェ興味あれ
- 〈連載〉
- 梁 永厚 / 芝田啓治 / 芝田 稔 / 山村嘉己

107号



- 〈特集〉 戦後50年
- 国連50年と日本
 - 大阪空襲と戦後50年
 - 被爆問題と天皇制
 - 戦後教育50年考
 - 終戦50周年フィリピンの場合
 - 国民経済の黄昏
- 〈寄稿〉
- 震災と復興
- 〈連載〉
- 山村嘉己 / 蘆田東一 / 芝田啓治 / 芝田 稔



季刊 『書評』 1996年4月 通巻108号

編集・発行 関西大学生協同組合・組織部『書評』編集委員会
連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎387-9998 or 368-1121 (内線4821))
頒 価 250円